

北海道立図書館江別移転40周年記念講演会記録

「資料で語る北海道の歴史」

- 「戦後史の出発～市町村要覧の史料的価値」・・・・・・・・・・ 1 p
講師：君 尹彦氏
- 「河野常吉のフィールドノートと地域史研究」・・・・・・・・・・ 16 p
講師：関 秀志氏
- 「古地図と地域史研究」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 50 p
講師：高木 崇世芝氏

はじめに

道立図書館は大正15年、札幌市北1条西5丁目に創立されました（建物は、現在道立文書館別館として使用）。その後、昭和37年度北海道社会教育施設設置審議会で改築の案が議題として提出され、この案件を検討する小委員会が設けられ、他府県の状況を調査し、視察報告書がまとめられました。昭和38年の栗田文庫の大量の寄贈も新館建築に拍車をかけました。そして、3つの運営の基本方針（図書館の図書館、何でもわかる図書館、520万道民の図書館）を掲げ、市町村立図書館を支援する第二線図書館という性格を前面に打ち出して、現在の江別市文京台の地（当時の地名は江別市西野幌）に移転したのが昭和42年です。

北方資料の整備についても、新館建設を契機に検討され、昭和40年に高倉新一郎氏をはじめ12名の郷土史などに関する専門家による懇談会を開催し、『北方資料収集会議規約』、『北海道立図書館北方資料整備計画』などが作成され、この時に北方資料の名称を使うことが決定されました。

一方、昭和39年に高倉新一郎先生が中心となって始められた古文書解読講座、その第4回（昭和41年3月）の受講者から会設立の話が出て、昭和41年7月の第5回の古文書解読講座の時に北海道史研究協議会が正式に発足し、事務局を道立図書館に置きました。北海道史研究協議会と道立図書館北方資料室はそれぞれの創設以来の密接な関係があり、平成18年度から事務局は北海道出版企画センターに移りましたが、現在も当館の業務を進めるにあたっていろいろ協力をお願いしているところであります。

平成19年度は、当館の江別移転の40周年の節目であり、記念行事を企画するにあたって北海道史研究協議会の協力により「資料で語る北海道の歴史」講演会を実施しました。会の運営の中心となっておられる君尹彦氏、関秀志氏、高木崇世芝氏の3人を講師としてお迎えし、10月の毎週土曜日に3回連続講座を開催しました。本書は、その講演会の内容を若干手直しして取りまとめたものです。当館北方資料室が所蔵する「市町村要覧」「河野文庫の野帳」「古地図」に焦点を当て、普段先生方がお話される内容とはひと味違ったお話を聞くことができました。3人の講師の先生、並びに北海道史研究協議会の皆様に心よりお礼申し上げます。

「資料で語る北海道の歴史」講演会（第1回：10月13日（火））

講師：君 尹彦氏

テーマ：戦後史の出発～市町村要覧の史料的価値～

<まえおき>

今日は北海道における市町村要覧の話をしていただこうと思います。市町村要覧に関心を深めている人は少ないと思うものですから、この機会に。道立図書館が第二線図書館という性格づけをしていくために、こんな資料の収集にも取り組み、40年たってこんなコレクションができていますという報告をしたいと思います。

後半では、北海道の歴史を作るときに、どんなふうにしるし市町村要覧が役立つのかということ、今私がやろうとしている、札幌市の歴史ビデオをつくる場合の例を紹介させていただきます。短い時間ですが、欲張って2つのことを今日話させていただこうと思います。

<道立図書館の要覧>

要覧を北海道の歴史の史料にしていくという時には、いろんな前提があると思うんです。今のもの1冊だけではなかなか史料としての価値は出てこないかも知れません。けれども、半世紀なり百年なり経ってそれを見返しますと思いがけないことが、その中にたくさん書かれていることに気付くでしょう。市町村要覧を継続的に集めて整理していかなければならないと思ったのは学生の頃です。

私は教育大学、当時学芸大学といました、そこの学生で、指導教官は河野広道先生でした。専門は考古学ですけども、北海道史も先生は担当されていて、河野常吉さんの道史編纂からの膨大な資料をお持ちでした。その中で、市町村関係の資料を、河野文庫目録の1ということで作ったことがあるんです。道庁から『北海道史料所在目録』6冊出しましたが、6冊目に河野先生の目録が載っています。校正をお手伝いしたので、抜刷をいただきました。そこには要覧だとか市町村史だとか地図等を市町村毎に整理してあったわけで、その中で重要な役割をしていたのが市町村要覧でした。

市町村要覧の史料的価値に目をつけた人はたくさんいますけれども、河野常吉さん、そのお子さんである広道先生と、親子2代が集めた要覧は、今になったらひっくり返しても手に入らない貴重なものになっている訳です。特に明治大正のものでは、河野文庫にあった要覧が現存の唯一だというのがたくさんあります。河野広道先生の代になってから、札幌の古本屋さんを駆けめぐって要覧専門に集めた時期があるんです。札幌の古本屋さんのお話で、昭和30年前後、広道先生がリュックサックを背負って、古本屋を歩いて、その要覧を片っ端から買い集め、リュックに入れて背負って帰ったという話を聞かされました。その頃はまだ要覧にそれほどの価値を見出してなかった。棚に並ぶようなことがなくて、棚の前に積んで一山いくらか、どれでも10円だとか、山積みにした中にまざってあったものです。そういう中に要覧が入っていたんですね。私が集めだした時でもそういう状態

でした。そのような時代でしたから河野先生がリュックサックを背負って古本屋まわりをして集めたのが河野文庫に残ったわけです。これに河野常吉さんが道史を作るために集めてあったものと親子2代のものをあわせて道立図書館で譲っていただくことになったわけです。

道立図書館は開設してまもない昭和初期に、要覧を集めた時期があったようで、今でもそれらが蔵書印を押されて残っています。100～200点ほどあったのではないかと思います。そのほか特別に集中的に集めたというわけではありませんが、随時増加していった分もかなりあります。これに河野文庫の要覧が加わりコレクションとしての形が見えてきたものですから、館が現在地に移転したのを機に、市町村にお願いしたり、道庁部課内の廃棄物を集めたり、一部は古本屋から購入して、充実に努めたところです。

道内の要覧をある程度集めてみて、道立図書館なりにまとめておく必要があるなと思いついて、統計書を中心にして、まとめてみたことがあります、40年代に。今回お話しするということで、今集まった要覧を2日間の予定で見せてもらおうと取り組んでみたら、とてもとても私の時代とはかけはなれた、質量ともに全く違ったコレクションになっていました。とても2日で目を通せなくて3日かけても一部しか見ることができませんでした。私が退職後も、道立図書館では、要覧の収集に力を入れて充実した現在のコレクションが出来上がったのだと思います。

今回この資料を紹介しようと思ったのは、春に6,800点の北海道市町村要覧の目録を道立図書館が作成したからです。道内では勿論初めての試みだと思いますけれども、6,800というのは多いか少ないかいろいろ勘定の仕方があると思います。これ等はまだ十分集まっているとはいえないと思いますけれども、それにしてもここに引っ越して40年かけて、これだけのコレクションをつくることが出来たことを紹介させてもらおうというのが、前段です。

要覧はパンフレットとして別置してあります。そのほかに図書分類としては統計書のところにも相当数の古いものが整理されています。札幌区だとか函館区だとかの刊行物です。その数は両者を合わせれば7,000点以上になるのではないかと思います。

<地方制度と要覧>

市町村要覧は、市町村がなければ出来ない訳ですから、行政のしくみ、行政区画、いわゆる地方制度とともに編集刊行され変化してきた資料であります。ですから、市町村の制度が変化すれば要覧も変わっていくということになります。

道内の市町村が、日本の全体の中に位置づけられて区画されるというのは、郡区町村編制法という規則からです。今まで大区、小区とっていたのを、もう一回郡区と町村というものに作り直しました。三新法と言って、3つの規則が出来ますが、郡区町村編制法だけが北海道に適用になります。明治13年に、だいたい1年かかって道内の区町村を作るんです。市というのはまだなかったですから、区と町村というのを作った。その時に国郡というのが昔からありましたから、国郡の郡と同じようなレベルといいますか、待遇を受ける区というもの、今で言えば市にあたるものを地方制度の中におき、その下に町と村をつ

くる、そういう二重の組織です。その郡をいくつかあわせて郡役所を作った。この時、函館区と札幌区と、北海道に二つだけ区というものが出来ました。本州では、この区に自治権というところまで行きませんが、税金を集めて区の中でどんなふうにするか相談する議会をつくるというようなことが出来たんですけど、北海道でそれが認められたのは函館だけでした。明治14年に函館区会が認められまして、函館区が明治14年から区の要覧というものを作りました。これが北海道の市町村要覧の始めということになります。

郡のほうですが、その時点では郡の要覧というものは作ったことがないのではと思います。私まだお目にかかっていません。郡の単位で、要覧にあたる統計書を作り出すのは道内で明治20年からです。道庁ができて、郡役所は拓殖事業の最前線になりまして、それにともない明治20年から郡役所単位の統計書が出来てくる。それが、古いところの要覧にあたります。数でいいますとほんのわずかしかなかったんですけど、それが明治30年から支庁単位の要覧となっていたわけです。

北海道に市制にあたる区制を初めてつくるのは明治32年です。札幌と函館と小樽の三つが新しい区制というものを施行します。明治33年から一級町村をいくつか道内に作ります。明治35年から二級町村というものを作っていく。数の上ではほとんどが二級町村になるんですけども、この二級町村が35年から、と言っても事実上道内に広く施行されるのは39年からです。それにともなって、全道的に区町村要覧が広まっていく。こんな経過をたどったのだらうと思います。

要覧を使うとき制度に合わせて見るということが必要ではないかなと思います。地方制度が変わりますから、それに伴って要覧の中味も変わります。従って内容はいろいろなものがあって、市町村要覧を定義するという事になったらむずかしい。でも今回お話するのに市町村要覧というのはこんなものですよという定義をまずしなければ話が進まないかなとは思ったんですが、どう考えてもいい文言がないものですから、今日は勘弁していただき、皆さんのイメージにある要覧ということでお話させていただこうと思っています。

一概に要覧をこんな目的で作っていますというようなことは云えません。時代時代によって違った見方をしていかなければならないと思います。それで何のために作り出したのかということで、大きく4つぐらいのことを感じています。要覧作製の第一の目的は監督官庁への報告です。明治30年に道庁の出先として20ぐらいの支庁ができ、その支庁長が町村を監督する権限を持っている。予算から何から全部支庁長に上げなければならない。ですから支庁が首を縦に振らなければ予算をなんぼ村の議会で議決しても認められない時代です。すべて町村のやっていることについては報告しなければならないので、その資料として要覧というものが第一に必要なのだらうと思います。

2つ目の役割としては、町長、村長、助役、書記、雇等、町村役場内の職員の執務資料として作らなければならなかったのでしょう。さらに議会が出来ますから議員に町村の実状を知らせる資料としての役目を果たしたのが要覧だと思います。だから大前提は行政的な執務上の役割を果たしていたのだらうと思います。

3つ目に、それがだんだん拡大、利用度が多くなってきて、部外者へのPR、村のPRに使われたと思います。開村何十周年だとか開道50年だとか、そういうような記念行事があ

れば、それに合せてお客さんと呼ぶ、行事の時に袋に入れるお土産用品とするというように、部外者への村のPRということが3つ目の目的です。

4つ目として住民への説明資料ということがあげられるのではないかと。この4つくらいの目的がそれぞれ作製する時代によって使い分けられて、作られてきたのではないかと。ですから市町村要覧は誰に配布するのかなというように、かなり内容も違ったものになり、非常にバラつきのあるものがありました。一口に要覧と言ってもこれを要覧と見るべきかどうか迷うものがたくさんあります。逐次刊行される中でたまたま1年分が特異な性格のものであっても、長期にわたるものからその1年分をはずして扱うというのもこれまた不自然な話ですから、いろんなものがまざりあってひとつの市町村要覧というジャンルをつくりあげているということができるかと思えます。

<要覧の特徴>

要覧の特徴というのは、何といてもコンパクトにできているということであり、一般的に言えばポケットサイズということでもあります。古いものはほとんどの場合B5をふたつに折ったくらいの大きさが普通です。どうしてそんなサイズのものになったのかよくわからないのですけれども、もともとそんな形の出版物を考えると『北海道勢一斑』というものが出ていました、明治30年代に。それが小さいポケットサイズのものでしたから、それをまねたというか、それがサイズの標準みたいになったのではないかと思えます。また、小さい版といってもいろいろあります。ジャバラのように、折本にしてあるものもありますし、冊子のようにしたものもあります。一枚もので大きな新聞紙のような紙に刷って折りたたみ、それに表紙をかけるというものがあります。共通して言えることはコンパクトな持ち運びサイズにしてるということです。

それからもうひとつの特徴は、記載の表記の仕方が統計を中心に行っているということでもあります。統計表を中心にして、統計表になじまないものについても、図表化することによって出来るだけ努めている。見やすい、わかりやすいという工夫をしています。それが極端になってしまうとかえってわかりづらい表記になっているということが実際たくさんあります。そうすると統計に説明文を加えてたり写真を加えたり、年度によって、担当者によっていろんな工夫をしていますけれども、原則的には統計表をもとに作り上げることが多いようです。統計表のほかに図表、折れ線グラフだとか、棒グラフ、円グラフを入れたり、説明は出来るだけ簡略なものにして、地図、鳥瞰図を入れる。極端になっていくと鳥瞰図だけの市町村要覧もある。鳥瞰図だけに表紙をくるませて要覧にしている。吉田初三郎のように、そういう専門業者といえますか、道内を歩いてたくさん鳥瞰図を画く人があられ、今になってみればそれが美術作品として評価され、収集対象になってきました。

次に内容をみていきます。例えば札幌村の例をそこに載せたのですが、一般的にこういうような内容が多いのではないかと思えます。『札幌村勢一斑』（昭和24年版）の内容は、「1. 位置及び地勢、2. 沿革、3. 村議会と役場、4. 主要官公衙その他、5. 現在戸口、6. 交通、7. 農耕地その他、8. 主要農作物、9. 金融機関、10 教育、11 社会施設、12 衛生、13 農地改

革、14 社寺宗教、15 村財政、16 歴代理事者及び現議員」からなっています。戦前のものは行政が担当する内容しか載っていません。戦後になりますと、行政以外の分野の、文化活動とか、何か美術の集まりがあるだとか、文化財があるだとか、行政以外の紹介のウエイトが増えていき、それに大判化し写真がだんだん豊富になって、印刷技術も上がると、市町村要覧も観光パンフレットのようになり、統計なんかだんだん片隅にやられていきます。高度成長期の市町村要覧はそんなふうになっている。そうするとそれに反省が加えられて、それじゃだめだと、観光案内の部分で別冊にして独立させて統計書にもどるとか、いろいろ工夫がされている。札幌市の例で言いますと、今は大きく二つに分けて、市がやる行政の中味の紹介を市政概要として毎年1冊出している。そのほかに札幌市統計書を出しています。あと観光だとか、一般的な事業紹介は、山ほどそれぞれの分野で出している。そっちのほうまで要覧に含めてしまえば大変なことになりますから、今のところ市政概要のようなものと、統計書の2分野を市町村要覧と見ていけばいいのではないだろうかと思っています。

次に名称ですが、いろんなタイトルがついています。函館区役所が最初に作ったのは『函館区役所一覽概表』明治14年です。一覽概表という名前だった。それが明治20年から統計概表になって、明治25年には統計表に変わります。先ほどいいました明治39年から『函館区勢一斑』と、一斑というタイトルになり、その後もずーと名前は変化してきています。しかし統計一斑だとか、市勢要覧だとかいうものが多いようです。戦後はさらにいろんな名前が生まれました。市町村名をそのまま、例えば『おしゃまんべ』とひらかなで書いて、概要だとか要覧だとか書かない、そういう要覧もやはり出した。それからハイカラに『石狩の姿』『クローズアップ浜益』だとかいろんなネーミングを付けているものがあります。さらに『えりも町 Data Book』と英語で書いたり、ここ江別では『江別彩時記』とっています。こんなふういろいろな工夫をしております。こういうものも内容的には市町村要覧でいいのではないかと思います。それから市勢の勢という字は政治の政を使っているところもあります。こんなふうにも名前も時代とともに変わって内容の変化とともに名称も変わってきている。それらを図書館としてはひとつの流れに沿った共通の内容を備えた資料群として「市町村要覧」という統一書名で呼んでいいのではないのでしょうか。

道内の多くの図書館はこれの分類を“35”と言ってNDCの統計の分野のところに入れていると思います。函館の図書館もそうです。しかし小樽の図書館のように“29”といって地理の分野に入れているところもある。小樽統計一斑というようなものについては、“29”からはずして、統計のところに入れるという図書館も。それから“31”といって、行政のところに入れる場合があります。それぞれ市町村の行政資料ということですが、必ずしも行政だけが市町村要覧を作っているのではないんです。一般の本屋さんで要覧を作ることもある。開道50年という行事があると、道の行事ですから支庁が支庁要覧を作る。そのほかに市町村が集まって展覧会、物産展をやる、それに伴って団体が要覧を作って配付する。中味は市町村要覧です。そのように民間から出来てくる要覧もある訳です。そういう訳で“35”の統計の中で整理している図書館が多いのでないか。利用のときには、それぞれの図書館で“29”の地理のところを見る、“31”の行政のところを見る、“3

5”の統計のところを見る、こんなふうな見方をしていただかなければならないと思います。道立図書館では原則として“35”の統計のところに入れている。ただし、冊子になった統計書のたぐいは一般図書の書架“35”の中にあって、パンフレットのような薄いものについては棚に並べられませんから、“35”の中でパンフレットとして別置して、地域分類をしております。従ってこの二つを合せて見なければならぬという不便がありますけれども、データ上は、一本になっているわけです。

道立図書館では7,000点くらいの市町村要覧を持っているという話をしましたけれども、実際どのくらいの市町村要覧が北海道で出ているのか、残っているのが7,000ですから刊行されたのはその倍はあるのではないのでしょうか。道立以外では北大附属図書館と函館で古いところを持っている。なんたって函館図書館はたいしたものです。この三つものを総合的に併せれば市町村要覧についてかなりのことが言える見通しがつくのではないだろうかと思えます。

<要覧の諸相>

具体的にそれぞれの要覧を見ていくことにします。郡役所の要覧というのは、道の出版物の中に入れるべきで、市町村要覧という範疇とはちょっと違うことになります。しかし、先ほどお話したように郡と区というもの、今の市ですね、同じようなレベルの地方団体の単位だったので、区の統計書と郡の統計書は同じような内容で作られている。それを切り離してしまうと郡区という単位の全体が見えなくなります。また内容として町村の統計を組み合わせていますから、町村資料としても有益です。そんな意味で、私は郡役所の統計書も市町村要覧に類似する道の出版物として、「市町村要覧」の中で一体的に取り扱っていいと思います。郡役所につづく支庁ごとの統計書、要覧も同じです。函館の図書館目録の郡役所統計は7点ですが、道内で約20点くらいの郡役所の統計書というものが残っている。これを道立図書館で、コピーでも保存されたらいいのではと思います。恐らく相当の数のものが出たと思う。郡役所というのは20ほどありましたから、例え明治20年から出したとしても、30年まで10年間出ている訳ですから、20×10年間で200点になります。2年にいっぺん出したところもあると思いますけれども、100や150点ぐらい出ていると思うんですね。残っているものは極めて少ない。これの調査は息長くやっつけていかなければならないと思うんです。明治20年の松前郡の統計書というのがいちばん古いと思うんですが、残っているものは非常に少ない。これから精力的に集めないとならないものです。

郡と同じようなレベルで函館区役所では14年から統計書を出し始めて、のちにそれが各年出るようになる。毎年1冊ずつ出すようになるのは明治39年からです。函館区勢一斑という名前が出るようになる。3つの区の中で函館が何といても、きちんとしたものを作っている。年次化と呼んでいるんですけども、毎年1冊ずつ出すようになるのは小樽区が明治37年から。第1回、第2回、第3回と回数を追って刊行します。小樽の図書館にこれが完全に揃っております。ある時代には第1分冊第2分冊と1回分を2冊に分けるんですけども、分かれたのも全部小樽の図書館では揃えています。さすが小樽ですね。たい

したものです。道内の3つの区の中では、年次化するのが小樽が一番早かった。札幌はですね、何でも道庁におんぶして、区独自ではなかなかやらないんですよ。財政的にも小樽だとか函館に比べれば雲泥の差があるわけです。札幌区は明治20年から、ぽつぽつとは出しますけれども、第1回、第2回と年次を追って出すのは、明治42年からです。そういう面ではかなり札幌は遅れている。

統計書が各年出てくるようになる。統計に説明をつけたり写真を加えたりして、いわゆる要覧というものが発生してきます。分離してきます。3つの区に限って言えば、要覧と銘打って、いわゆる年次化するのは、こっちのほうは札幌が一番早いです。大正9年から札幌が年次化して、統計とは別に独立させて要覧も刊行していきます。次に函館が大正12年から、小樽が大正15年からです。そういうことで言えば大正に入ってから札幌もひけを取らないような出版物を出したことになります。もちろんその前にも要覧というタイトルはボツボツ出てますけれども、年次化に限っていうとそんなことになります。

函館小樽札幌3区以外の町村はどうなのか。それを2日間道立図書館に通って調べたのですが、実はあまりにも道立にたくさん集まっており、残念ながら全体に目を通していません。3つの区以外の道内の町村で、こんなふうには要覧が作られてきたということ、いままで見たものだけでお話するとこんなふうになります。二級町村制が全道的に施行されたのが明治39年だということ、さきほどお話しました。どうもこのあたりが町村要覧のひとつの出発点であったのではないかと。具体的に残っているものだけで言えば、一番古いのが今の浜中町、釧路の霧多布村です。明治39年2月に『統計一覧表』というものを編さんしている。道立図書館にある一番古いものはこれです。コピーですから現物がどんなものだったか私もちょっと記憶がないんです。大きい1枚もので、ガリ版でなく石版刷でないかと思います。それを町村要覧のようなコンパクトに作り替えたのが、その次の年の明治40年です。明治40年に作った現物は函館の図書館が持っています。以後浜中は1年おきくらいに作っていくんです。『浜中村勢一覧』という名前です。浜中がどういう事情で全道に先駆けて作り出すのか興味あることなんですけれども、よくわかりません。

それから古いもので、道立図書館で苦労して集めたんだろうと思うんですが、室蘭町が明治41年にガリ版刷りで『室蘭町統計』というものを作っている。これが第1回の室蘭の統計書にあたるものなんです。その次『室蘭町統計』といって年次が入っていないものがある、43年の出版物なんです。この次『室蘭町統計年表』というりっぱなものが、第3回と銘打って作っている。この第3回目になると、『統計摘要』という別の英文の町の要覧を作っている。外国貿易の関係があったんでしょうか。道内で英文入りの要覧を作ったのはこれが初めてではないかと思います。第3回は明治44年に出るんですけれども、この時から横組みにする。これは印刷技術の上で非常に画期的なことだと思います。算用数字で横の統計表を作るというのは、道内町村で室蘭が最初でないか、なおかつ英文入りのものまで作って。しかもそれが室蘭の印刷屋で印刷されている。そういうことで明治の末になると北海道もこういうところまで発達するといえますか、非常に貴重なものではないか思います。

そのほか道立図書館で持っている古いもので、『手稲村勢一斑』(明治41年)があります。

謄写版刷りです。しっかりとした町村要覧の内容を持っている。同年の明治41年は札幌附近の藻岩村でも出しており、明治の末になるとかなり道内の町村で要覧が出るようになる。村勢一覧という名前を使うところが多かったのです。

その中で画期的なものが出来たのが、明治44年の角田村です。今の栗山です。泉麟太郎の入植地で、『村勢一覧』というタイトルですが、地域研究書のようなりっぱな書物です。明治44年はいっせいに全道で要覧が出るんです。それは皇太子の行啓があったからです。皇太子が行かない場所も使者を派遣する。そういうところはみんな要覧をつくる。札幌市もそれにあわせ、夜寝ずで札幌区史を作ったんです。皇太子が来るのに合せてあまりにせっついて、トラブル起こして後始末の問題になります。全道で、かなり苦勞して町村要覧を作ったんだろうと思います。ですから39年あたりから始まって、皇太子が北海道にくるといふことで、それに合せて町の紹介をしようといふことで、このあたりが道内の町村要覧が普及するきっかけでなかったかと思います。

その次に全道的にたくさん作られたのが大正7年です。開道50年の記念行事があり、そのためにたくさんの要覧が作られる。内容もバラエティに富み、編さんする人も役人だけでなく民間の人たちも加わりました。これを要覧に入れるべきか首をひねるようなものもあります。そうかといえば、要覧とは銘打たないで中味は町村要覧であったり、いろいろなスタイルで刊行されたのが開道50年を契機にして作られた要覧です。一部は売られていたらしいです。町村でつくったものも売られていたようです。『釧路町勢一斑』の奥付を見ますと町で編さんしているんですけど、売捌所として何々書店とか、釧路駅売店なんて書いてありますので、かなり売ったところもあるようです。要覧をこれからいろんな機会にご利用いただいて生かしていただければありがたいと思います。

<札幌村の要覧>

今日は、要覧を使うとこんなことが言えるんだぞといふことで、ひとつ『札幌村勢要覧』昭和24年版をもとに、今作ろうと思っているビデオの番組についてお話をします。古老のお話を元に札幌村の歴史を作ろうと思っているわけです。しかし、お話だけではできないので、お手もとに配ってあります24年版の要覧を組み合わせ、札幌村の戦後史のシナリオをどのようにえがこうとしているか紹介させていただこうと思います。

札幌村については、ご存知の方もいるかも知れません。慶応2年に箱館奉行から遣わされてきた大友亀太郎という幕吏が中心になって御手作場を作ることから農業開拓が始まりました。ですから札幌市の歴史の起点の1つで、その開拓の中心というのは今の東区役所のあたりです。その後幕府が倒れ事業は明治の開拓使に引き継がれる。しかし勝てば官軍負ければ賊軍のたとえ通り、負け戦の人たちがやった事業に陽が当たらないばかりか、むしろ札幌村に入った人たちを本府建設に駆り出すわけです。それで一時札幌村は疲弊するわけですが、明治10年代に入って立て直し、基幹産業として玉葱を作るわけです。要覧の表紙にも玉葱が載っています。玉葱というのは今ではめずらしくないただの野菜です。寒さが厳しい冬を越すための野菜として定着してくるのは、しばれても溶かせば新鮮な玉葱に戻るからです。農民が共同で栽培技術を開発して、自分自分の家の土に合せて種

をつくる。札幌黄というブランド名をつけて外国にも売り出すということになります。この玉葱づくりを生産活動の中心に据えて村づくりをしたのです。その村が昭和30年に札幌市に吸収されます。いわゆる昭和の大合併で、犠牲になったというとおかしいですけども、そうならざるを得なかった事情もあります。その村の最後のところを戦後史の出発ということで、ビデオ番組を作りたいと思っています。お年寄りからお話を聞いて、何を戦後の歴史の社会事象として取り上げて組み立てるか、旧札幌村の人たちのお話を集める作業を札幌村文化センターとやってきたわけです。40人ほどのお話を集めましたので、その何人かを今日紹介して。このお話で、こういう項目を作ったということをご理解いただきたいと思います。しかし、お年寄りのお話だけでは、とても戦後の歴史の組み立てということは出来ません。それを肉付けし筋立てする材料として要覧を使いたいのです。

<戦後史の出発>

まず札幌村の再建というタイトルで、戦争が終わった昭和20年から札幌市に合併される30年までのことをビデオ番組にしたいと思っています。お話聞いた人はたいがい太平洋戦争のことを強く記憶し語ってくれます。そこで、戦争が終わったときこんなふうに考えた、半世紀たって、今その時のことをどのように思い出すか、というお話を何人かの人に語っていただくことから始めたいなと思っています。幸いなことに80歳台の方は大抵これについてたいへんな思いいれがありますが、プロローグというか問題提起の形で、紹介するのが出だしです。たいいのお話の中に出てくるのが、丘珠の飛行場のことです。もともと陸軍が作った飛行場ですが、この建設やアメリカ軍の空襲の話抜きにして戦後の話は始まらない。丘珠飛行場の後始末をまず取り上げなければ札幌村の戦後は語れない、こんなふうに思っています。これについては残念ながら札幌村勢一覧に情報はございません。戦争に負けて、札幌にアメリカ軍が最初に入ったのが丘珠飛行場です。まず丘珠飛行場を占領して、そのあと札幌市の中心部に占領軍が進駐します。

丘珠の飛行場は空襲されました。けれどもアメリカの空襲で壊滅的な打撃を受けたわけではありません。その点無差別的にやられたのはむしろ飛行場でなくて、小樽や石狩でした。先日、石狩におじゃまして空襲の資料をいただいたのですが、軍事基地のある札幌村よりも石狩の方がはるかに被害が大きい。この時札幌村では板東さんという農家の方が亡くなりました。その娘さんのお話をまずビデオで最初に紹介します。板東さんはお嫁にあって、今岩浪さんといいますけれども。息子たちに自分が空襲にあってお父さんが目の前で亡くなったということをお話したことがないそうです。とてもいやで話せない。また、飛行場を作るときの朝鮮の人達の労働の過酷さ、それはたくさんのお話の中に出てきます。三千人もの朝鮮の人達を集めた。朝鮮の人だけで足りなくて、日本のタコ部屋の人達と苗穂刑務所の囚人など二千を集め、昭和17年から工事を始め、一部分18年に使い始める。敗戦になるまでこの人達は飛行場に留まり、なんかかんかの工事をしてきた。戦争に負けてアメリカが入ってきて、最初にやったことはこの朝鮮の人達を本国に送るかえすということでした。この時、札幌村の住人の数は六千人くらいです。そこに朝鮮の人が三千人、タコ部屋の人が約二千いたわけですからその人たちの始末というか、帰還が敗戦

処理の第一番の仕事だったのです。このことも重要なこととして、札幌村の歴史の中で残しておかなければならないと思います。それとともに逆に戦争が終わって、出征していた人たちが、外地から戻ってきます。戻ってきた人は幸せなほうで、たくさんの方が戦病死しました。出征家族の例として坂野さんのお話をビデオで聞いていただきます。8人兄弟いたのに3人しか残らなかったというのです。

それから札幌市と札幌村は背中合わせで、道路一本おいて境目になっている。戦後引き揚げてくる人たちは札幌市に入りますが、市内には食べれないものから、畑のある札幌村にどんと住みつくんですね。24年の要覧に社会施設という項目があり、外地引揚者が430人と載っています。これらの人たちは地元の人でない、引き揚げてきて行き場がなくて、吹きだまってる人たちなんです。それは札幌村の中にいる人たちであって、さらに札幌村と札幌市との境目のところに、ワッと引揚者たちが住みついていきます。東区役所のあたりはちょうど札幌村との境目ぐらいです。街が無計画のままのびていきます。その後始末がどうにもならなくなった時点で再開発をすることになり、14、5階建てのアパート群が生まれたのです。

まず、戦争とその後始末のことについて、岩浪さんのお話を聞いていただきます。

(ビデオ1の放映) 岩波英子さんの話 (平成17年2月13日収録)

私は敗戦のころ市役所の近くに住んでいまして、まったく空襲なんかあったのを知りません。札幌は空襲のない街だと言われてきた。何故アメリカは札幌を空襲しなかったかという、クラーク先生が作った街だからと教えられてきました。こういうようなことを信じこませるのも占領政策というか、私はかなり大きくなるまで札幌に空襲はなかったと思っていました。実はそのことは、まったく事実ではないんだということを、この札幌村の聞き取りでイヤというほど知らされました。作田さんという、苗穂の町内会長されている方で、敗戦の時は苗穂の工機部に勤めており、そこで空襲にあった話を教えられて、札幌にしながら、札幌市史を書きながら、そういうことにまったく気付いていなかったことを大いに反省しているんです。

(ビデオ2の放映) 作田康治さんの話 (平成16年10月6日収録)

<札幌黄作型の確立>

敗戦とともに、アメリカ軍は朝鮮の人たちを送り返し、それから囚人は苗穂監獄に戻すことをしたようです。そこに今度引き揚げ者が来る。それから招集されていた人たちが戻ってくる。六千人くらいの村が数年で二千人くらい人口が増えるんです。出て行った人と、入ってくる人で、村の人たちがかなり入れ替わる。若い人たちが分家しなければならない。新しく分家して農業を継いでいこうとしても、札幌村の農地は狭いんです、未開地はほとんどないくらい開けていましたから。どうやって分家するのかということが課題でした。実は小作制度が行き渡っているという問題がありました。そこに農地改革が行われて、小

作人を自作に替えていくという大きな変化がありました。こんな話しをビデオ番組の二つめの柱としたいと思います。

札幌村のタマネギ農家は、自分たちで種を選ぶだとか、道具をつくるだとかしてきましたが、戦後の大きな変化は機械化です。タマネギが成り立ったというのは札幌周辺の奥さんたちが労働者として、出面として札幌村に入り込んでいたからです。そこに機械、耕耘機が入ってきて、それがだんだんトラクターに変わる。それから馬が三輪トラックに変わる。戦後の出発は、機械化と平行して進む。出面を雇ってやっていた時代は、タマネギ御殿を建てるようなこともできたが、戦後になって機械が入り、それを借金して買うもんだから、常に借金、借金。だから戦後の農家は、借金農家になってしまったと。それで馬が機械に変わっていくタマネギ農家の様子を坂野さんのお話でうかがうことができます。

(ビデオ3の放映) 坂野利満さんのお話 (平成16年5月2日収録)

タマネギのほかにも米も札幌村ではやっているんです。一部なんですけれども。北のほうですね。日の丸農場だとか、富樫農場だとか。この次のお話してくれた伊藤さんは、親が富樫農場の小作の方です。札幌市内の大農場の中で、小作争議が全くなかったという富樫農場が自作農創設に踏み切る経緯を見ていただいて終わりにしたいと思います。

(ビデオ4の放映) 伊藤勝治さんのお話 (平成17年11月9日収録)

レジメの2枚目にあります「区民が語る東区の歴史」というのは、こんなお話から項目をたて、それに24年版の村勢要覧の内容を当てはめて、組み立てられないか考えている訳です。例えば農地改革の話の具体的な数字については要覧の中に載っています。札幌村が札幌市に吸収されていく最大の課題は都市近郊農業の問題です。これについては要覧の7、8項に載っています。また女性に参政権が与えられて、札幌村で最初に女の人が選挙に行ったとき、紋付着て行ったそうです。それぐらい最初は女性も緊張して選挙に行ったというお話をいただきました。そんな話も織り交ぜながら、地方自治の項を組み立ててみようと考えています。

私は学生の頃、戦後史をやってみたいなと思いました。しかし、まだ30年代です。公開されている史料はごく限られていましたし、現時点の歴史の見方、位置づけがつかめな。とてもやれそうもないとおじけづいてしまいました。定年になって学生の時のことを思い出し、お年寄りからうかがった話をうまく筋だてし、要覧等を使って肉付けし、戦後史をサンプル的に作ってみようと思い掛ったわけです。きっかけは、先ほど紹介した空襲の話で、文献だけにたよってはよくないと反省しました。そこで戦後史の出発ということに取り組んでみたいなと思っているのです。ビデオが出来上がりましたら、見ていただこうと思っています。

(質問者 1)

外国人労働者の話が出たのですけれども、戦後の炭鉱地域と引き揚げ方が違うのではありませんか。

(講師)

アメリカが北海道の地に最初に足を踏み入れたのは9月十何日か、千歳の飛行場に降りて、アメリカ、イギリスの捕虜をまとめて送り返すという仕事をやったはずで、その次に、9月22日に丘珠に来て、9月23日から朝鮮半島の人たちを束ね、丘珠から連れ出しました。札幌市内が占領されるのが10月の3日か4日なんです、小樽から入ってきて、その前に丘珠の人たちはアメリカの手でトラックに乗せられ、いなくなったと聞いています。地域によって違いがあったのでしょうか。

(質問者 2)

北海道による歴史編さんが「新北海道史」刊行後とだえており、新しい史料の収集がなされていないようだ。札幌市をみると博物館ができておらず、資料の保存がなされていないがどう思うか。

(講師)

公的な歴史書の編さんがされているいないにかかわらず、研究はみんな続けていくべきだろうし、史料の収集保存に知恵を出し合うことが大切だと思う。博物館を建てるには多額の税金が必要で、札幌市では計画を作ったものの財政的な見通しがたたず、まだ着工されていない。しかし資料の収蔵をしていないわけではないので、協力していくべきだろう。

【講師プロフィール】

昭和11年浦幌町生まれ

昭和36年北海道学芸大学卒業、教員として小学校に昭和38年～昭和40年、昭和53年～昭和57年に勤務。この間北海道立図書館(昭和41年～昭和47年、昭和52年)にも勤務され、現在の北方資料室の基礎づくりに尽力されました。

また昭和48年～昭和51年、滝川市立図書館長(道からの派遣)を勤められています。その後、札幌市教育委員会指導主事を経て、平成元年より北海道教育大学札幌校助教授(のち教授となる)。平成14年教育大学を定年退職後、豊頃町が設置した二宮報徳館の運営、また江別市史、札幌市史などの市町村史編纂にも携わっています。

現在、大津・十勝川学会会長、北海道史研究協議会常任幹事。

著書に『アイヌ文献目録』(みやま書房・共著)、『県史シリーズ 北海道の歴史』(山川出版社・共著)、『近代日本と北海道』(河出書房新社・共著)、など。ほかに『新札幌市史』(札幌市)、『北海道教育史』(北海道教育委員会)の編集・執筆。

<配付資料>

戦後史の出発 ～市町村要覧の史料的価値～

君 尹 彦

(1) 市町村要覧の刊行

(ア) 目的、内容、印刷、配布

(イ) 収集、保存

(2) 戦後史を組み立てる

(3) 区民が語る東区の歴史 (案)

(ア) アメリカ軍の占領

(イ) 札幌黄作型の確立

(ウ) 新憲法発布と村治

(資料1)

市立函館図書館蔵郷土資料分類目録第3分冊(昭和39年12月31日現在)
の「統計」に所載の郡・支庁・市町村要覧点数

地域	郡役所	支庁	市(区)町村	備考
石狩	0	2	41	内札幌26
空知	0	2	69	
上川	0	2	37	
後志	1	8	31	内小樽26
桧山	0	3	33	
渡島	3	10	131	内函館57
胆振	0	6	37	
日高	2	4	6	
十勝	0	11	24	
釧路	0	5	27	
根室	1	1	10	
網走	0	6	31	
宗谷	0	2	6	
留萌	0	3	12	
計	7	65	495	合計 567

(資料2)

区民が語る東区の歴史 (案)

ビデオ版 (全3巻)

(第1巻) 札幌村の再建 (昭和20-30年の社会、農業、行政)

あついお盆の一日 ~昭和20年8月15日からの出発~

1 敗戦に直面した感慨 (半世紀後にふりかえっての思い)

1-1 村内住民の思い出話

1-2 村出身者で出征中に村外で敗戦を迎えた人の思い出話

1-3 村出身者で勤労奉仕等で敗戦を迎えた人の思い出話

2 アメリカ軍の占領

2-1 丘珠飛行場と日本軍解隊

2-2 人の移動一村からの流出

朝鮮、中国人の送還

土工部屋、囚人労働の解放

2-3 人の移動一村への流入

徴兵、召集兵の帰還

外地引揚者の居住

2-4 村の再編

人口膨張

新リーダーの登場

3 札幌黄作型の確立

3-1 農地改革

3-2 農業経営の改善

3-3 玉ねぎ農家の発展

3-4 都市近郊農業の課題 (牧草、えん麦、米作、種いも)

3-5 畜産

4 新憲法発布と村治

4-1 地方自治 (村議会と役場)

4-2 村民の国政参加 (女性参政権、道議を含める)

4-3 都市化する農村 (札幌市の膨張、村の消滅)

(第2巻) 札幌市東区誕生 (昭和30-47年の社会、産業、行政)

(第3巻) 人づくり 街づくり (昭和20-47年の社会、教育、文化)

「資料で語る北海道の歴史」講演会（第2回：10月20日（土））

講師：関 秀志氏

テーマ：「河野常吉のフィールドノートと地域史研究」

まず、今回のこの講座の講師をなぜ北海道史研究協議会のメンバー3人がつとめることになったかということについて申し上げます。道立図書館がここに移転するちょっと前の昭和41年に私どもの北海道史研究協議会がスタートしたのですが、そのきっかけはその当時、道内で市町村史の編集が盛んになってきた時代です。地域史の編集をするためには、まず古い文書とか記録が読めなければいけないということで、市町村史の編集に携わっていた人たちの要望があって古文書解説講座というものが始まりました。

それで最初は道立図書館が直接開催したわけではないのですが、すぐに図書館の事業になって、札幌市内で何回か開催しました。それが図書館の事業になりますと、そこに集まっていた人たちが、ただ解説講座がある時にだけ集まるのではなくて、そのメンバーを中心に全道的な組織を作ろうということになりましてこの北海道史研究協議会ができ、協議会の事務局をこの図書館さんが引き受けてくださり、ずっと最近までお世話になってきたのです。そして、昭和42年に館がこちらの方に移転しました。

そんなことがありまして、長い間、図書館、現在の北方資料部に、昔は北方資料室と言っていましたけれど、お世話になってきたので、我々の協議会が移転40年の記念すべき年の事業のお手伝いさせてもらおうと講師を引き受けることになりました。

次に講座をどんな内容にしようかと相談した時に、図書館の北方資料には史料的高い膨大な北海道地域史の研究資料があるので、その資料のPRをやろうじゃないかということになりまして、私もお手伝いすることになりました。私の長い間の経験から言って、北海道史、市町村史、地域史を研究するための第一級資料がたくさんあるのだけれども、まだ必ずしも広く利用されていない。そういう資料の筆頭に挙げられるのが河野常吉氏の「フィールドノート（野帳）」だろうと思います。それ以外にも沢山あるのですが、それで私の経験を元にしながら「フィールドノート」と北海道の地域史、市町村史の研究というテーマを設定して今日この場に立たせていただいたということです。

それからもう一つは研究協議会としてお世話になっているだけではなく、私個人としても、これまでの北海道史研究のほとんど全期間と言っていいぐらいですが、図書館さんにお世話になってきました。道立図書館はここに移る前には、今の道庁の南門の近く、今文書館の分館になって書庫になっていますが、その前には三岸好太郎美術館の建物として利用されたこともあります。あそこであって、大学を出てからも札幌に出てきてしょっちゅうあそこにお邪魔しては資料を利用させていただいていました。こちらに移ってからも、もちろん頻繁にお世話になってきました。

そんなこともありまして、それは僕だけではない、高木さんもそうです。君さんは別格なのですね。もと職員でもあって、実を言うと直接僕なんかはお世話になった方ですから、

同じ講師でもちょっと別格なのです。そのようなことで、今日これから「フィールドノート」の話をさせていただきます。

まず河野常吉さんですが、北海道史に多少とも関心をもっている方、あるいは研究している方は言うまでもありませんが、よく知られている方で、一言でいえば北海道史研究の基礎を作った方、北海道史研究の先駆者だと言っていい方なのです。

それで彼の経歴につきましては、お手元の資料の最初の資料の1、これは北海道百年記念事業として道が開拓功労者の伝記シリーズを編集したのですが、そのシリーズの編集が終わった後でそれに関連した資料集を2冊出して、その中に伝記に取り上げた人たちの略歴とか基本的な資料を載せているのです。それをコピーしたものです。河野常吉さんの略歴はそれで分かっていただけだと思いますが、それにも書いてあるとおり、大正の北海道史の編集を手がけます。また、地方史では室蘭市史をはじめ、いくつかの市史の編集にも携わっているのですが、単なる歴史の研究者ではなくて、明治20年代の末から大正時代にかけて、その時期は北海道の歴史でいうと北海道開拓の最盛期、最も開拓時代らしい時期になるのですが、その最盛期に全道に限なく歩いて克明にその当時の、開けつつあった各地の状況をメモして、「フィールドノート」に残しています。

また「フィールドノート」だけではなくて、調査に行った時に、役場とか警察署とか漁業組合とかの色々な団体を訪ねて、そこにある資料を提供してもらったり、提供してもらえないでそれをメモしたりした。そういう「フィールドノート」以外の生の膨大な資料がある。

それからその調査した結果は後で申し上げますように『北海道殖民状況報文』として出版されています。彼は殆ど全道を歩いているのですが、刊本としては5か国しか出ていません。

ところが彼の資料を見ていると、報告書や本として出版はされなかったけれども稿本というのがありますし、稿本までは行かないけれど、現地で調査してきたら報告書にまとめるということを前提にして、項目ごとに調査の成果を整理した草稿もあります。皆さん、そのところ（この会場）にも刊本を出していただいておりますが、あのスタイルに合わせた原稿書きをしているのです。そのようなこともありまして、フィールドワーカーと言いますか、単なる研究者ではなくて全道をくまなく丹念に歩いて克明にメモし、現地で資料を集めるというようなフィールドワーカーとしても超一級の巨人だったと思います。そんなことを言うと、他にも似た人物を聞いたことがある、知っているなとすでに思われると思いますが、それが松浦武四郎だと思います。

松浦武四郎はご承知のように文化15年(1818)から明治21年(1888)まで70年前後生きてきた人です。河野常吉さんは幕末の文久2年(1862)に生まれ昭和5年(1930)に69才で亡くなっていますから、幕末から明治半ばまで同じ時代を生きられた人たちです。時代的にはそんなに離れていない。僕ら北海道史、地方史を研究をしていて、幕末のことを知ろうと思えば真っ先に武四郎のいわゆる『蝦夷日誌』を見ます。武四郎の場合も今、北海道出版企画センターから秋葉実さんが苦労をなさってシリーズで出しておられる「野帳」がありますが、「野帳」があってああいう正式な報告書である『蝦夷日誌』がまとめられているわ

けです。それと似たような形で、明治の半ばくらいから大正の初め頃、その頃は場所によって多少違いますけれど、その地域の村や町の成立期に相当しますが、その形成過程を生々しく描き出せるような、そんな第一次資料というものがあまり残っていないのですね。

それで僕は、先ほど紹介していただきましたように、留萌管内苫前で生まれ、高校の母校が隣町の羽幌だったものですから、大学で日本史、北海道史を勉強してすぐ母校に戻って日本史の教員をやりながら留萌の沿岸の歴史の研究をやっていたのです。ところが、その村や町の成立過程を知る資料というのは本当に少ないのです。

僕が河野さんの資料群と出逢ったのは昭和40年代の前半でした。ちょうど道立図書館が河野家の資料の収集を始めた頃でした。河野常吉さんの資料と言えば図書館にある資料が基本的な資料で、道立図書館が『北の資料』の11号で「河野常吉資料目録」を出しておられるのですが、これが昭和49年なのです。河野さんのコレクションは一度にまとまって入ったのではなくて、段階を追って入ってきたみたいですね。それでその初期の段階で図書館に河野さんの資料があるということで見せてもらい、「フィールドノート」とそれに関連した色々な資料があるというのが分かって、一時期それにのめり込んでいったのです。

ちょうどその頃、昭和30年代の後半から40年代の初めころは、僕がちょうど羽幌の高校に勤めていた時期で、『羽幌町史』の編纂をしていました。昭和43年に開村70年の記念事業として1冊出たのですが、その時にはまだ河野家資料は知っていなかった。ところがそれから30年後に100年記念事業で町史をまた編集することになり、手伝いまして、今度は河野さんの資料をよく知っていたものですから、明治の開拓期の羽幌についてはかなり詳しくまとめることができました。

まあそのような経験を持っているものですから、今日河野さんの、特に「フィールドノート」の話をさせていただこうということになったわけなのですね。

さて、河野さんは北海道史研究史上の巨人という方ですので、色々な方が河野さんの紹介とか伝記に触れておられるのですが、お手元の資料に代表的な伝記や研究を紹介した文献を何点か挙げさせてもらいました。

河野常吉さんという人は高倉新一郎先生にとっても師匠格の人で、先生には北大の伝統的な学問の世界では恩師がいるわけですが、在野の河野さんも実をいうと高倉先生にとって恩師の一人でした。それで河野常吉の資料紹介とか業績の解題とかをたくさん書いておられますが、一番まとまっているのは、『北海道史の歴史―主要文献とその著者たち―』で、昭和39年に出ています。それとか先ほど言いましたように、北海道が開拓功労者の伝記を編集しましたが、その『開拓につくした人々』シリーズの第8巻に河野さんの伝記が入っていたり、北海道出版企画センターさんが河野常吉さんの著作集を出したときに高倉先生が監修者としての文章を第1巻に載せています。

それから、ここには書いておきませんでしたけれども、研究史の上から言うと、奥山亮先生、専門が北海道史研究、戦後新しい視点で北海道史の研究をやられて、僕らも大変お世話になった先生の一人ですが、奥山先生が『管見北海道史』というのを北海道地方史研究会から出して河野さんのことに触れておられます。

比較的新しいもので大変素晴らしい、恐らく河野さんの今までの伝記の中で一番充実し

ている本と言え、ここの道立図書館の職員であった石村義典さんが、平成10年に『評伝河野常吉』という分厚い本を出しておられます。これは長い年月をかけてまとめられた大変良い本です。まあそんなような本がありますので、河野常吉さんのことを詳しく調べてみようかと関心を持たれる方は、ご覧になったらよろしいかと思えます。

さて先に進みまして、先ほどからも何回か出てきました道立図書館の「河野常吉資料」の目録なのですが、ここに（お手元）あります。今日は時間の関係でこの資料の全貌を話すことができませんが、この中に「フィールドノート」（野帳）の目録があります。この「フィールドノート」は古い時代から比較的新しい時代まで沢山あるのですが、今日は河野さんが明治27年に道庁の職員、事業手になってから、明治35年に事業手を辞め、引き続いて拓殖に関する調査の囑託と肩書きが変わるあたりくらいまでのいわゆる「北海道殖民状況調査」の時代に相当する時期のものに限定したいと思います。彼がフィールドワークに力を注いだ時期、最も精力的に歩いた時期だということになると思いますが、この時期の彼の調査の年代と地域を書いております。

明治27年に採用になり28年に石狩・胆振・渡島・後志の調査をします。29年には根室と北見を調査して、30年に今日後で詳しく話します天塩に入ります。31年に釧路・十勝・日高を調べて、翌32年には渡島と後志を調べ、33年には渡島、根室のほか千島に渡りまして、34年に小樽・岩内・寿都、これは国でなくて支庁ですが、この調査をするのです。このあたりが「北海道殖民状況調査」を中心にして彼が調査した時代と地域なのです。ところが、ほとんど全道を精力的に調査したのに、道庁が出版している調査報告はそこに書いてあるとおり5カ国に過ぎないのです。

明治31年に根室と北見が出て、それから32年に日高が出て、その翌年に釧路が出るということですね。北千島の『調査報文』というのは彼一人でやったわけではないのですが、これに彼も関わっています。だから5カ国分しか出ていない。（石狩・後志国の一部については昭和62年北海道出版企画センターが出版した）それ以外は何で知るかと言うと、道立図書館にある「河野常吉資料」で調べるしかないということになります。

では彼はどんなことを調べようとしたのでしょうか。それは調査項目から分かるのですが、お手元にコピーして配っていただいたのがあります。これは「開拓状況調査項目（市町村別）」となっていますが、これは天塩国の資料群の中にあるのです。これは私の私物なのですが、オリジナルはこういうものです。道庁の用紙で彼の自筆です。後で「野帳」にも鉛筆書きの河野さんの文字が出てきます。

この調査項目には「地理」、「気候」、「動植物」－「自然動物」、「自然植物」－と書いてあります。さらに「運輸交通」、「沿革」、「部落」、「戸口」。「戸口」は「戸数」、「人口」、「府県別」、「職業別」、「男女別」。戸口については、村ごとの『北海道戸口表』というのが道庁になってから毎年出ていますから、それでも分かります。それから“生計”というのがあります。これがなかなか良いですね。さらに「漁業」、「農業」、「牧畜」。それぞれ「来歴」、「現況」と「前途」。「前途」というところがなかなか良い。

というのは、河野さんが道庁の職員になってなぜこのような調査の仕事に携わるようになったのかと関係しますので、その時代背景についてふれておきます。道庁はちょうどこ

の時期から北海道の内陸部の開拓を、当時の言葉で言えば拓殖事業と言うこととなりますが、これを強力に進めようとした。本格的な長期計画は明治30年代になってからですが、そういう時期でありました。古今東西を問わず、何か政策を進めようとする現地の状況を把握しなければいけないということになります。ちょうど幕末に松浦武四郎が、箱館奉行に雇われて、全道隈なくあれだけ克明な調査を行った時代背景が幕府の蝦夷地開拓にあったのと同じです。

時代は30年ほどずれていますけれど、まず克明に道内各地の殖民の状況を把握しようということで道庁が河野さんに目をつけ、河野さんは期待に違わず精力的に調査をするわけです。それで調査を行う際にその地域の「前途」を意識しているのですね。

話を調査項目にもどしますと、それから後は「商業」、「製造」、「樹林」、「雇賃」、「地価」と続きます。河野さんは色々な地域で地価とか賃金などに大変関心を持っていて、記録しているのですね。河野さんにとっては、その地域を捉えるのに「地価」や「賃金」が大事だと考えたからなのだろうと思います。

「地価」は「市街地」、「耕地」、「海産干場」に分けています。それから「風俗人情」、「教育」、「衛生」、「社寺」があり、“**此外適宜目ヲ設ケテ記載スベシ**”と書いています。ですから地域によってこの全部が揃うと限りませんし、これ以外のものも加わるわけですが、まあこういう項目について「国全体の、国というのは天塩の国とか石狩の国とかをいうのですが、動向と国の中の各町村の動向とに分けて、報文をまとめることを前提にして聞き取り調査をするのです。

ですからこれから触れる「フィールドノート」の内容というのは、ただ単に聞き取っているのではなくて、こういう報告書をまとめるということを前提にして聞き取り調査をしているのです。もの好きに昔のことを聞くのではなくて、ちゃんとした目的をもって、一つの構成を頭の中に描きながら、聞き取りをやっている。それは「フィールドノート」（野帳）を見ると大変よく分かります。

さてお手元の〔資料2〕「野帳」（フィールドノート）は、膨大な「河野常吉資料目録」の中の関係分をコピーしたものです。量が多いものですから、ページを節約するために小さくて申し訳ありません。これでいうと4ページの上の方の段の、左の方から2段目の右端あたりが天塩の調査の「フィールドノート」ということになります。天塩国関係の「フィールドノート」は5冊ですが、ここには6冊挙げています。最初の『明治三十年天塩国出張中日記帳』というのは、帰ってきてから天塩国調査の日程をまとめたものです。

僕はこの「天塩国出張中」という日記帳を見て本当に河野さんがメモ魔というか、大変几帳面な人だということがよく分かるのです。公の調査に関係のない私的なことまで克明に毎日毎日書いているのですね。そこのところ（この会場）に実物がありますが、僕はこの1冊を全部、昭和42・43年頃に解読したのですが、毎日書いて家族の誰々に手紙を出したとか、何処々々でお酒を飲んで何円何銭払ったとか、克明に出納簿と日記帳を合わせて書いています。何日の何時ごろ誰々に会ってこんな話を聞いたとか、何月何日の晩は戸長に招かれて一杯やったとか、何日は誰々さんと碁を楽しんだとか、勿論勤務時間ではないですよ。そんなことまで克明に書いていて、調査だけではなくて、調査旅行の過程その

ものが大変よく分かる日記帳が1冊あります。これは後でまとめたものですから大変読みやすいものです。実際の「フィールドノート」は『天塩国（調査）第一』、これが増毛市街と別荘村・岩尾村の部分で、9月の13日から24日です。それから第2冊目は増毛市街と暑寒別・増毛・舎熊・阿分村で、10月の7日から15日までです。まず何故増毛から始めるかと言うと、ご承知だと思いますけれど、当時は鉄道がありませんから、まず河野さんは札幌から小樽へ汽車で行き、小樽から船で道内の旅をするのですね。それで天塩国に行く場合は、小樽からまず増毛に行くのです。この時の調査はまず増毛とその周辺を調査して、その次に沿岸を北上したかと言うと、そうではなくて船で島に渡るのです。天売・焼尻を調査して、戻ってきて今度は留萌郡、苫前郡を調査して天塩郡を調査するというように北上して行くのです。それで3冊目が「焼尻島・天売島」で4冊目がまた増毛に戻ってきて留萌郡を調査してそしてずっと北上します。

そして5冊目が鬼鹿・力昼・苫前・羽幌・遠別・天塩・幌延村をへて宗谷まで行くのです。宗谷では本格的な調査はしていないのですが、宗谷まで足を伸ばします。そして島経由で帰ってきます。

今日はこの後、前半で一般的な話をしまして、後半でお手元の資料にもありますように、この「フィールドノート」の一部分と一緒に読んでみたいと思います。そしてそのメモを読みながら、地域史研究にどう役立つかと言うことを具体的にお話したいと思います。今日これから読むところは量が結構多いので、4冊目の中から苫前村と羽幌村の、しかもそれぞれ1人ずつ選んで聞き取りの部分を読んで行こうと思うのですが、それも全部読む時間は多分ないと思いますから、適宜端折りながら読んで行きたいと思います。

さて、皆さんも経験しておられると思いますが、手帳とかメモとかいうのは、あとでちゃんとまとめた資料と違って大変読みづらいです。それで、慣れるのに結構時間がかかりますし、慣れても読めない部分があります。読めないというか、他の記録と違って、「フィールドノート」の場合はまず書き間違い、誤字というのがあります。急いでメモしていますから。

それからその人独特の省略の仕方があって、なかなか読めない部分があります。それから気を付けなければいけないのは、話し手が話したことを正確には書いているのだけれども、話し手の勘違いというのが結構あるのです。

こういう記録の場合は河野さんの記録に限らず、どんな記録でもそうですが、聞き取り調査というものに付きものです。話してくださる人の思い違いとか記憶違いとかがあります。そうしますと、この「フィールドノート」を実際に地域史研究の史料として使う場合に絶対必要なことは、できるだけ関連する他の記録があればそれとつぎ合わせる作業をやらなければならない。ところがどうしようもないことがあります。というのは他に全然付き合わせる記録がない。だからこそ河野さんのノートの価値があるのですけれども、ですからもうこれは間違いではないかと思うけれども、どうも断定できないというのが沢山出てきます。これはしようがないのですね。ですから我々は河野さんのメモの誰々談の日記によると、という風を書いておくしかない。で、いつか他の人が、そのことに関してはこんな記録もあるよということで、突き合わせてみたら正しかったり間違ったりということが

後になって分かる。ですからこういう記録を歴史の資料として使う場合には、その時だけで決着しないで、後世の研究者とかに委ねて他の人たちがそういう判断ができるような書き方・使い方をしておかななくてはいけないなといつも感じています。

それでこれから読んでいくのですが、僕が最初にこの資料に出会ったのが40年近くも前なのですが、留萌の沿岸の町村史をやるときに読んで、今回また20年ぶりくらいで見たのですが、前に読めていたはずなのに読めない部分がある、前に読んだメモを見たらああそうかと納得する部分があります。というのは前後関係でないと字面だけいくら見ても読めないのが沢山出てくるのです。メモですから。それから、いくら見ても前にも読めなかったし、今回読んでも読めないというのもあります。ですから、他人に言われたらああなんだ、そんなことだというのが結構あるのです。皆さん一緒に見てください。ということでお手元の資料は、僕が30年以上も前に道立図書館でコピーをさせていただいたものを元にして作りました。それで少し濃い目にプリントしたので、こちらの方が読み易いところもありますが、全体的には図書館で用意して下さったプロジェクターの画面を見ながら進めたいと思います。

〔以下はテキスト解説：「苫前村 医師村山氏」の聞き取り部分から〕

明治“五年頃天塩ハ”、これちょっと薄いですが、“五年頃天塩ハ盛ンナリ”ですね。河野さんの字では、こちらの資料の方を見てくださるとおおよそ分かると思いますが、「盛」という字です。この一字だけ最初から見せられたらなかなか読めないですけど、これ、“盛ンナリ”です。ええと、事務官2名ですね。それから“医師モ二名遣ハセリ”、「派遣」の「遣」という字です。「フィールドノート」を読むときには、読めない字があったらそれにあまりとらわれなくてどんどん進むことです。そうすると似たような字が何回か繰り返して出てきて、何だ、こういう字だったのかというのが後で分かります。分からないなりに進めた方が良くと思います。

“医師モ二名遣ハセリ。但シ其丈用事ナカリキ”と書いてあります。天塩にお医者さん2名、開拓使が派遣していたけれど、2名派遣するほどの用事がなかったということは、患者さんが少なくて閑古鳥が鳴いていたということでしょうかね。明治の初め頃の天塩の医療事情がよく分かる。本当の初期です。和人が定住し始めた頃のことです。

その次に行きます。“水戸藩ハ”、これ、水戸藩ですね。それで河野さんが村山さんの聞き取りを選んだのは、こういうことなのです。苫前場所（苫前郡）は幕末には庄内藩の領地だったのです。そして明治の初め、2年から4年までは水戸藩、最後に水戸県になりますが、水戸藩の領地だったのです。それで庄内藩側の関係者の記録も多少はありますが、水戸藩の方は本当に資料が少ないのです。で、開拓使文書の中に「水戸藩書類」というのがあります。廃藩置県の前段階で、明治3年に開拓使が諸藩に各藩の支配地域の状況を報告させている、何種類かの書類があります。道立図書館にもありますし、文書館にもあります。図書館のは県になったときですかね。それである程度輪郭が分かりそうなものだけでも、実際地域の歴史をまとめていくとなると本当に限られた情報しかないのです。そこで少し

でも当時の土地柄とか実態を知るためには、こういう経験者の話をできるだけ利用していくということが不可欠になる。それで僕は『苫前町史』とか『羽幌町史』を編集したときに、この河野さんの「フィールドノート」の中にその当時の聞き取りがないかと思っていたら、期待通りあって、小躍りした40年前の経験を今のように思い出しているのです。

さて、話を元に戻します。次に“水戸藩ハ鮭ニカヲ入レ、手漁ヲナセリ”と書いてあります。天塩川はご承知のとおり鮭がたくさん獲れていた。それで鮭に力を入れて水戸、茨城県から漁師を連れてきて一時期、本当に短期間ですけども鮭漁に力を入れる。「手漁」というのは直営ということです。だから藩が直営で漁場を、鮭の漁場を経営したということです。これについては、水戸藩関係の他の資料の中に出てきます。

それで、“明治六年苫前永住ハ、苫前、力屋、合セ永住ハ”。これは「八十」と読めますが、まだ八十戸まではいないですから、十戸で“今ノ市街地ハトウグイ原ニテ”とある。“トウグイ”というのは、イタドリのことです。苫前の今の市街地は、今苫前は市街地というのは上街ですが、当時は市街はなくて、今の港がある海岸沿いの下の方に市街地があったのですが、後にこの上の方に市街地が移るのです。そのことなのです。ですから現在の市街地あたりを思えば良いと思います。

次の“土人ノ家屋”、土人の家屋というのはアイヌの人たちのチセですね。“家屋散在スルノミ”と書いてあります。だから、アイヌの人たちの家が散在するだけの非常にさびしいところだったということです。それで“明治二十三、四年ヨリ盛ニ増加ス”と。これは大事なことで、苫前は明治23、24年頃から盛んになってきたということですね。それで“病氣ハ”、ポンと飛んで今度は、一転して病気のことで。“昔時ハ非常ニ梅毒多カリキ”と。昔は梅毒が非常に多かったが、“今ハ消食器病”、今で言う消化器病が多いとあります。つづいて“風土病ハナシ”。それから、“年々脚氣多キコト”。その次は何なのか分かりませんが、しばしばこう書いてあります。何でしょう、字を比べたって分からない。前後関係でこういうことにしましょうというしかない。ここでは“多キコトナリ”でしょうか。これはもう好きなようにうまく前後関係が繋がるように読むしかないのです。

次は“又間歇病多キコトアリ”。間歇病というのは「おこり」と昔呼んでいました。一定の時間をおいて熱が出たり寒気がしたりする、マラリヤの一種になるのでしょうか。開拓時代には間歇病というのは全道的に多くて、開拓者を悩ましたのですが、これはここだけではなくて、全道至るところでありました。十勝に入った晩成社でもあの時代にたくさんの方がおこりで苦しんでいましたね。

で、“昨年ハ殖民地ニ間歇熱多シ”とあります。明治29年には、殖民地というのは原野ですが、このおこりが流行った。“今年ハ三分ノ一ニ減セリ”と。今年は三分の一くらいに減った。

でその次は、“飲水ハ宣シ”。“市街ニテモ山ノ流水ヲ用フ”と書いてある。井戸水ではなくて、山から流れてきた流水を使ってということでしょうかね。

“便所ハ何トカ”にて、これ、何か書き直している。「箱」だと思ふのですね。“便所ハ箱ニテ”、次の字は底だと思います。ちょっと書き直しています。便所は枠だけあって底がないということです。いかにも開拓初期と言う感じがします。で、“吸込ミ便所ナリ”と。

そんなのをすいこみ便所と言うのですかね。よく分からないのですが。粹だけがあって底がないというのが吸込便所と言うのですかね。

“廿七年市街地ヲ区画ス”、これもごちゃごちゃと書いていますけど、旧漢字の“區劃”です。今、市街ハ海産干場也”と。鯨などを捕ってそれを干さなくてはならない。昆布もそうです。漁獲物を干すところですね。干場がなければニシン漁も昆布漁も出来ないわけです。いくら採っても干すところがなければ。ですから漁場と干場はセットになります。

“モト栖原”。栖原というのは、江戸時代の有名な場所請負人、あの栖原です。で、“栖原、今ハ中塚金十郎持也”。昔は栖原が持っていて、現在は中塚金十郎、苫前の代表的な漁業家ですが、で、“不都合ニ付、水戸藩設ク”でしょうか。“一ケ年貸料一坪一円”と書いてあります。海産干場を借りるのにどのくらいだったかというのが分かります。

こんな調子で行くと時間が足りなくなりますので少し飛ばして、“明治廿九年五月大火アリ”。昔はですね、山火事、野火が多くて被害が多かったのです。ここのところでは山火事の話をしています。それから、市街地のことを言っていますが、ここのところを読んでみますか。“今市街地総代二名カ八十石ニテ借ル”ということでしょうかね。先ほどの干場の話の続きなのです。

その次を省略して、昆布のことをちょっと見ます。“昆布ハ一人ニ付二十駄、十五駄ノミ也”。昆布はどのくらい採れていたかということ、一人に 20 駄とか 15 駄だけだということですね。次は「自」ですね。次は「家」という字です。“自家賄ニモ当ラズ、明治十四・五年頃ハ人員少ナク、一人ニ付”。これもごちゃごちゃと書いてありますが、後で書き直しているみたいですね。“一人ニ付百駄モ取レリ”と書いてあります。昆布漁は、昔は 100 駄も採っていたけれども、河野さんが行った 30 年ころには 20 駄とか 15 駄くらいしか採れなくなっていたということですね。

それからですね、今海鼠の値段が上がって、密猟事件なんかも起こっているようですが、海鼠のことが書いてあります。昔は苫前だけではなくて全道的に海鼠が随分たくさん採れて、江戸時代にも海鼠は蝦夷地の重要な産物で、中国にも輸出されていた、その海鼠です。

“明治八、九年頃ハ羽幌海鼠ト云ヒ”。「羽幌海鼠」という言い方をしていたのですね。羽幌は非常に有名だったのですね。次を見ましょう。“海鼠ノ大ナルモノ沢山”ですね、“沢山出テシガ、今ハ大ニ衰ヘタリ”と。

こんな調子で漁業のこと、それから鯨のことも書いてあります。そして、今度は栖原のことについて、もうちょっと行きますと、“請負ノ頃ハ”と書いてあります。“請負ノ頃ハ栖原ガ压制シテ”と書いてあります。場所請負人の時代です。河野さんは栖原にはあまり良い印象は持っていなかった。“压制シテ柁屋ヲ建ツルコトヲ禁シ”と書いてあります。ここのところは生活の家屋のことですね。栖原はこの時には押さえつけて、それで柁葺の家屋を作ることを禁止した。で、“皆草屋ナリキ”と書いてあります。まあ草ぶきの家ばかりだった。“明治六年来タリシ”でしょうか。この“とき”はみなさんご承知のとおり、これでトキと読ませるのです。たて棒引いてカタカナの“キ”を書いて、これで一字にして“トキ”と読ませます。“六年来タリシトキハ立派ナル宿屋モアリキ”と。6年、村山さんが天塩から苫前に来たときには立派な宿屋もあったということで、ここでは生活のこ

と、家のこと、建築のことにふれています。

で、“**栖原ガ商店ヲ開キシハ明治八、九年頃也**”。今度は商店のこと。やはり地域の社会がそこに成立するためには、必ずお店やさんとか職人さんですね、諸職が必要です。それで、苫前について言えば、最初の商店は、元の請負人、当時は漁場持ちが開き、それは明治8、9年ころだった。

今度は商業について、“**川崎船来レバ各自競ヒ**”でしょうか。競争の「競」という字になっています。川崎船で、当時は遠くから来る場合には、人も物も川崎船で来たのですね。それで“**川崎船来レバ各自競ヒ行キテ品ヲ持来リ**”。だから、川崎船が着くということは、その商品が着くということですから、皆そこへ押しかけて、それでその商品を買って手に入れた。だから初期の商業というか流通の状況が目には浮かびますね。次は、“**栖原ノ商店ノ前モ後モ然リ**”、ここのところどうもはっきり読めないのです。自然の「然」という字の「然」、それなら意味は通じます。

それから、“**栖原ハ習慣**”でしょうか、“**旧慣**”でしょうか、“**ニテ何トナク威張りシテアリ**”。とにかくいばっていたということの意味はわかるのですが、字面だけ読んで。“**人ガ多ク帰レリ**”でしょうか。“**又請負商人多カリキ**”と書いてあります。このあたりで分かることは、明治初期のこの地方の流通、商業がどのような形で始まったかということでありま

す。ここで5分ほど休ませてください。その間にこれからどこを読むか考えたいと思います。

(午後4時)20分前までに一応終えて、後、もしご質問その他あれば何う時間にしたいと思います。それで、中を飛ばして9ページの下のところまでまいります。

先ほど言いました庄内藩のことについて、どんな聞き取りをしているかを見ることにします。ここのところで“**幕府ノ頃**”とあって、“**佐々木栄吉**”、“**川村定吉**”、“**中西多吉**”、“**菊地市太郎**”という4人の名前があり、そして“**庄内藩ノ頃ハ**”で始まります。ということは幕末であります。幕末と言っても庄内藩が幕府から領地を与えられたのは安政6年(1859)ですが、そして翌年の万延元年(1859)実際の引継ぎをして本格的な開拓が始まるのがその翌年の文久元年のことなのです。ですから幕末のほんの数年間のことなのですが、その、“**庄内藩ノ頃ハ本陣ハ浜益**”。本陣は浜益にありまして、“**苫前ハ番頭、番頭在勤ナリ**”と。そして、括弧して“**昔ノ五百石取**”とあります。大体五百石取の藩士が詰めていたということですね。で、“**古丹別ニ百二、三十名外郷夫ナルモノアリ**”と。次は“**最初番頭**”、“これは”五百石以上、上下7人“で、次に

人名が出てきて、“**金井右馬之助**”。これは有名な人で、ここの図書館に金井右馬之助の史料があります。これは庄内藩の史料を昭和40年代に、多分君さんの頃じゃないかと思いますが、コピーなされた庄内藩関係の史料の中に彼の文書が出てきます。

次は“**黒川一郎**”、それから、“**次ハ黒崎与助(此時閏四月十五日引上)**”。ちょうど黒崎の時には庄内藩の支配が終わり、閏4月に明治維新で引き上げたということです。

次は、これだけ見てもどうも分からないのですが、前後関係から言うと“**警察ハ**”のようです。“**警察ハ徒士目附也**”、“**是衛一方ナリ**”と。次は“**郡奉行ハ田方也**”、“**出納**”と書いてあります。“**出納ナリ**”。これは会計の仕事。次もよく分からないのですね。“〔何と

か] 向一方也”と書いてあります。何て読ますのかな。政治向きですか。そうですね。“政治向一方ナリ”と読めそうですね。次は、“取方ハ郡奉行ノ下ナリ”でしょうか。これは書き損じたみたいで変な字ですけど。で、“戦時ハ”、これは“なにだ”でしょうか。ああ、“小荷駄”、小さな“荷駄”ですね。“戦ノ時ハ”でいいでしょうかね。戦時は、ということですね。次は“手付トハ漁場也”。“手付”とは漁場の経営を担当するという意味でしょうね。

で、“代官ハ漁場一切ノ掛リ也”と書かれている。その当時のあそこに詰めていた人たちの役職とか、任務とかがこれから分かります。もう少しこのところを読んでいきましょうか。“モトハ”、これ、“元は”ということだと思います。“モト”ですね。失礼しました。こういう読み違いがあります。“天塩ニモ代官アリシガ其後代官ガ苦前ニ居リテ天塩兼務セリ”だろう。どうもこれ“兼務セリ”と読ませたらそういう風に見えそうです。“百二十人、戸数ハ四十(家来共也)”。 “郷夫ハ別也”。農民と職人とか土木事業なんかを兼ねた連中です。

“長屋ヲ建テ五戸、六戸ト入レ置ケリ”。長屋を建てこの人たちは五戸、六戸と住んでいた。“徒士ハ居ラズ足軽ノミ”と。徒歩はいないで足軽だけだと。“足軽ハ高下アリ、表面ハ一様ナリ”。“六石ト七石ノ俸給アリ”でしょうか。給料は六石と七石で、この辺りが面白いのは、“樺太警衛ヲ兼ル”ですか。「レ」に見えるが、「ル」でしょう。庄内藩はあそこだけではなくて、樺太の警備も兼ねていた。それで、“故樺太へ赴ケハ七石トナル(国ニ居レハ五石也)”と書いてあります。“右ノ外扶持一日一升味噌三十匁ヲ与フ。男子生ルレハ十五歳トナレバ今ノ十年ニテ一人前ニシテ一人前一升ノ扶持、児供ハ五合、二合ナリ”。“右ハ皆(何とか)也”と。このあたりはごちゃごちゃしています。

次に“大抵永住足軽ナリ”と書いてあります。給料は国元では安いけれども、苦前では、国元では五石ですか、樺太兼務の場合には七石、苦前に来たら六石になって、給料に差を付けていたということが分かります。まあ、こんな調子でこの庄内藩の時代のことが書かれています。

次に水戸藩のことを見ることにします。10 ページの下です。“水戸藩”と書いてあります。“苦前ニ奉行”が置かれ、“民政局”というのがあって、“御手代”が居て、“是ニ諸種ノ区別アリ”という風に読ますのかなと思います。手代でも色々区別がある。“別ニ警衛ノ区別モナカリキ”と書かれてあります。これは先程出てきた字で、これ、“警衛”と読みます。およそ30、40人だということです。水戸藩の場合は、苦前が本拠地となり、天塩と力昼と利尻と焼尻に出張所があって、それぞれ手代を何人か置いた。それで焼尻島には、“手代一人出張越年ス”と書いてあります。水戸藩が焼尻の出張所に派遣した者は、島で越年していたということになり、これは珍しいことではないかと思えますね。幕府の警備の時でも役人が島に留まって“越年ス”ということは、僕の知っている限りなかったことなのです。次は“水戸老公ガ午年ニ巡回シタルコトアリ”。藩主の彼(徳川昭武)は午年明治3年に来まして、これは大名旅行を水戸からずっとここまで北上して来るのです。その日記が、家来の日記がありまして旅のことがある程度分かる。で、“苦前ニモ三十日余滞在、天塩ニモ出張ス”、ですから、かなりの長期滞在なのです。単なる物見遊山と違っ

て、水戸藩は明治の初めの諸藩の北海道経営の中では大変力を入れた。どこの藩も明治の初期の頃は財政事情は火の車で、ほとんど命令されながら北海道開拓に力を注ぐ余裕がなかった。水戸は力を入れたのですね。

それで、殿様がわざわざ一月以上もこちらに滞在して現地を丹念に調べ、開拓の方策の手を打とうとしていた。当時の開拓には漁場の開拓と原野の農業開拓が、大きく分ければ、農業と漁業があります。農業は非常に厳しいので向うの水戸の方のやり方ではとても上手くいきませんし、開墾して未開地が耕地になるまで相当の年月とお金がかかります。ところが漁業は儲かるわけですね。それで、この時の方針ではまず漁業に力を入れてそれで儲け、それをもとにして次の段階、農業開拓に力を入れようというような方針をこの時に決めています。

藩主は天塩には出張したが**“島へ渡ラズ、赴カズ”**と書いてあります。殿様は島には行かなかったということです。

まだ続くのですが、水戸藩の支配に関する苦前の村山さんの聞き取りは、省略して、今度は羽幌に進みます。16 ページ上段の**“渡辺渡”**のところですか。

羽幌でも色々な人から聞いているのですが、なぜ渡辺さんからの聞き取りのところを読むかと言うと、明治の初めに道内各地で捕鯨が結構盛んに行われるのですが、その中でも目立っていたのが羽幌とか留萌だったのです。それで実を言うとその前、明治の初めの開拓使時代の初期に増毛郡が山口藩の支配地になった。で、山口はご承知のとおり捕鯨が盛んだったところですから、それで捕鯨で儲けようと思って、色々計画したのですが、結局その時は失敗したのですが、10 数年後になって、明治 20 年前後になって羽幌の捕鯨が非常に盛んになる。勿論その前、捕鯨の前に鯨獲りにやっていた例がないわけではないのですが、羽幌の市街地を含めて人が盛んに入り込むようになったきっかけが捕鯨でした。で、捕鯨に従事したのは加賀の連中なのですが、そしてその連中が鯨も獲れるということで、鯨漁もやるようになって、加賀の連中以外の津軽あたりからも漁業者がやって来るようになって、羽幌は急激に開けて行くのです。それで、捕鯨というのは、ちょっと面白いのです。この渡辺さんからの聞き取りというのは大変具体的で良いのです。

捕鯨については他の資料もないわけではないですけども、彼の談話が結構詳しい。それでちょっと読んでおきます。これは割りと読みやすい方です。先ほどの村山さんの聞き取りのメモよりは読みやすい。**“明治十九年金沢士族斎藤”**、これ「斎藤」です。「藤」は読めるけど、「斎」という字が言われてみれば「斎」ですね。僕は斎藤を知っていたからすつと読んでしまったのですが、言われてみるとああ「斎」だな、と。斎藤知一（ともいち）とも、知一（ともかず）というかも分かりません。**“来タリ。ポンイカツナイノ岸ニ漁場ヲ貰フ”**と書いてあります。

“ポンイカツナイ”というのは羽幌の市街地の北に高台があるのですが、その手前に流れている小さな川なんですけど、そここのところに捕鯨の漁場をもらった。金沢も割りと捕鯨が盛んだった。それで羽幌に目をつけた。実を言うと羽幌に来る前に岩内でやろうと思った。ところが岩内で漁師の人たちの猛反対に会うのです。漁師の人たち、鯨をえびすさんと言って大変大事にしていたと言うか、神様扱いにしていた。大漁の神様、だからそのえ

びすを獲ったら不漁になるからと猛反対だった。

ところが、ちょうど良い具合にその時金沢の士族だった増毛の郡長、有名な郡長林頭三が協力して羽幌に捕鯨場をもらうことができた。まあそれはともかくとして、まず、19年に漁場をもらった。

そして、“廿年ヨリ着業”、“五月上旬、川崎ニテ小樽ヨリ渡ル”ですね。“惣数漁夫廿五名、兎鯨三頭、座頭一頭、七月引揚グ”ということです。まず、初年度20年はこうです。

“廿一年”は“漁夫三十人”で5人増えました。で、鯨も増えて、“兎鯨”が5頭で7月に引き揚げた。“此秋捕鯨場ヲ齋藤ヨリ水産会社へ譲ル”と。で、齋藤さんが個人で始めたのですが水産会社、帝国水産会社と言ったと思いますが、水産会社に捕鯨の権利を譲ったのです。そして、渡辺は現地の支配人になるのです。だから彼はずっと後まで捕鯨に従事するので捕鯨に詳しいのです。

彼は河野常吉さんが30年に行った時はまだ現地にいたので話を聞いたということです。で、“廿二年ヨリ水産会社ニテ着業、齋藤、渡辺等引続キ支配人トナル、始テ漁夫ヲノセ汽船来ル。”それまでは川崎船で来ていたのですが、22年になってようやく汽船で来るようになったということです。それで、漁夫も急に増えて85名で兎鯨を27頭も捕って7月に引き揚げる。だから漁期は春だったのです。23年はまた増えて漁夫が150人で、兎鯨が28頭、入道海豚が7頭、で、大きさは2尋より3尋だということです。1尋といえば今で言う1.5メートルくらいですが、そのくらいの入道海豚ですね。それから座頭鯨も1頭捕ったということです。で、大きさが5キロ半の鮫1頭、5キロ半の巨大鮫ですね。まさか、甚平鮫ではないでしょうけど。まあこんなでかい鮫もいたのです。それから“廿四年”には“会社ノ都合ニヨリ休業”急遽“在留ノ社員ガ廿八人ノ漁夫ヲ伴来タリ”、“兎鯨十二頭”を捕りました。“廿五年会社ニテ八十五名、十三頭”、“廿六年ハ八十五名、十六頭”とあります。

次に少し飛ばしまして、今度は、捕鯨の内容のことがここに書いてあります。“漁夫ハ加州人ヲ主トシ次ハ佐渡、越後、越中、越前人モ交レリ”。“渡辺氏ハ廿一年ヨリ越年ス、廿二年ヨリ漁夫ハ勝手ニ越年スルモノアリ”と。“年”ではなくて“勝手ニ”ですね。“漁期ノミ捕鯨所ニ使ハル。加州人多キハ此レニヨル也”と。

次は鯨のことですのでちょっと飛ばしまして鯨に戻ります。“鯨ハ八十五人ナレバ”。85人が一組になるのでしょうかね。“八艘也”。船はですね。で、その“八艘”のうちの“四艘ハ銚、四艘ハ網船也”と。それで、“二艘ニテ網ヲ鯨ヲ囲ミ、又他ノ二艘ニテ二重ニ”。次は糸へんに「ぎょう」(堯)という字なのですが、何て読ませますかね。これは廻らすという意味なのです。要するにまず網で囲んでいる。また、念のためにその上からさらに外からまた網で囲む。二重にということです。

で、“地方へ”。これ、地方(ちほう)のことではなくて、“地方(じかた)”です。島の人には本島の方を地方(じかた)と言います。“銚船ヲ廻シテ鯨ヲ網ニ追込ミ、網ニ掛リシ後、金時モリ”と書いてあります。“金時モリ”の後に、括弧して“網付モリ”とあります。金時銚というのは銚に網が付いている銚ということですね。後で網がつかない、ただ撃ち込むだけの銚が出てくるので、それと区別している。捕鯨用の特殊な金時銚、かんざ

し銛というような、そういう特殊な銛があったのです。続いて“ヲ弱鯨ハ四本、荒鯨”、荒鯨（あれくじら）というか荒鯨（あらくじら）というかは分かりませんが、“ニハ六、七本打ツ也、又鯨ヲ弱ラス為メ、矢根モリ”とあります。括弧して“筭モリ”ですね。続いて“トテ網ナキモノ弱鯨ハ二十、荒鯨ハ五十モ打チ、鯨弱リテ沈ミ”。“カナキトキ殺シモリ五六本ヲ腹ニ突透ス也”と書かれています。当時の捕鯨の技術、方法がよく分かります。“此時鼻ヨリ血ヲ噴キテ死ス”、と。“但シ七分迄ハ死セリ”。失礼。「リ」でなくて「ハ」ですね。“死セハ沈ム”と。鯨というのは大体7割くらいは死んだら沈むのです。困ッテ網船ニテ吊リアケ他ノ船ニテ引ク也”と書いてあります。だから、せっかく捕っても沈んでしまったら困るので、網船で吊り上げるのです。“船ノ大ハモリ船”、この“モリ船”は”六尋半、櫓四枚、人五人”。“網船”は“八尋半”ですね。「ヒロ」ってカタカナで書いてありますね。（会場から：これね、八尋と書いて八尋（やひろ）と読ませるのです。）“八尋”にカナを振っているのです。ああ、そうですね。「ヤヒロ」というカナなのですね。ありがとうございます。“皆櫓”何とかと書いていて、あ、“用フ”です。失礼しました。上の方に。そして、“櫓七枚”で“人九人、十人”です。

もう時間になりましたね。こんな調子で、まだまだ、肉はどう加工するか、値段はどのくらいか、それから他の捕鯨場はどこだとか、細かく書いてくれていて、羽幌の漁業、捕鯨業、村の成立のきっかけとなった捕鯨について大変詳しく書いてある。

そういうわけで、一部分ですけどもフィールドノートを読んできましたが、終わりにこのノートの史料的な価値について述べたいと思います。河野さんがいたところには幕末、明治初期のことを知る人がたくさん健在でした。それでこのフィールドノートから幕末から明治30年くらいまでの地方の村々、漁村を含めて、あるいは原野の開拓が始まったところの原野の村々の成立過程が大変具体的に分かります。それから、こここのところにはアイヌの人々のことが出てきませんでしたけれども、島の、このフィールドノートの『天塩国調査』〔3〕の天売・焼尻のところにはアイヌの人たちのことが結構出てきます。名前は伏せてありますけれども。アイヌの社会が崩壊していく過程がよく分かります。それが一つです。

それから、たいていの方々は彼の書いた著書とか編纂物しか普通は読まないのですが、この「フィールドノート」とか、それからこの時一緒に集めた色々なデータを丹念に検討することによって、そういう出版物の背景が大変よく分かるし、その基礎データがよく分かる。どういう聞き取りを元にしてこんな本が出来てきているか。出版物には調査編集のほんの一部分しか活かしていないわけです。膨大な聞き取りを元にしてああいう本、報告書、その他の道庁の出版物が出来上がっているということが大変よく分かります。

それからこういう生の「フィールドノート」を見ますと、彼の、フィールドワーカーとしての問題意識というものが大変よく分かります。それは松浦武四郎と全く同じですね。明確な任務を持って、目的を持って、どういうことを明らかにしたいかということ事前に整理して、この人に会ってこういうことを聞こう、どこに行ったらこういうデータを集める、できあがっている統計とかがあればそれももらおうし、もらえない場合には夜、宿で筆写する。

「天塩国状況調査地理」と書いてあり、地理とか先ほど言った調査項目がありましたが、

そういう順番で分かったことをまとめて行くのですね。これは第一次の草稿です。中を見ますと、いっぱい朱を入れて直したりしていますが、結局これは陽の目を見なかった、天塩国の報告書が出ていませんから。けれども、こういうのを見ると、彼の調査がこういう形で本来ならば活字になるはずだったのだなあというようなことが分かる。このように、彼の問題意識とか調査の方法などが大変よく分かります。

彼がこのような膨大な資料を残してくれたお陰で、我々は北海道の各地の村や町の成立過程を知ることができます。そういうことで、道立図書館がお持ちの、これはたまたま僕個人が持っているものですが、図書館の書庫にある河野家資料を見ますと、膨大な資料で宝の山みたいなものです。是非これから皆様もそうですが、他の研究者も図書館に行けば良い資料がまだまだたくさんあると宣伝していただければ、僕は図書館にお世話になってきたものですから、大変うれしく思います。どうもお粗末様でした。

(質問者 1)

調査項目がありますが、後ろから4つ目の「風俗と人情」という項目があると思いますが、これについては特徴とか、どういうことが書かれているとか、先生の調査では何かありますか。

(講師)

天塩国については報文が出ていないので、これのところの草稿も全部網羅しているのではないのです。ですから、人情とか風俗のところを彼がどういう風に、天塩についてまとめようとしていたかということとは分かりません。

だけれども、個々の聞き取りの中は、至るところに明治30年頃の状況が出てきますので、そんなのを繋ぎ合わせていけば、例えば何処々々から来た人たちは大変、漁が上手くて、何処々々出身の何々氏は他のところが不漁でもしっかり魚を獲っていると。

それから当時は非常に世相が荒れていて賭博が流行している。警察がまだ整っていないから、そうかと言って、やっていることを知っていて捕らえないわけにいかない。そこで予め調べに行くぞと言っておいて調べに行った時には賭博していないようにさせたと。それほど賭博が一般的だったとかね。そういうことが出てきます。

(質問者 1)

例えば、江差とかその他の方にあるつり事業会社がありますよね。それについて何か記述はありますか。

(講師)

僕は分かりません。

(質問者 1)

ただ作られた人名辞彙がありますよね。その中には福田の茂次郎という項目でかなり書いているのです。そういうようなことで渡島とかそのあたりのところに入っているかどうか。

(講師)

それは先生、調べてみてください。膨大なフィールドノートですから、僕は丹念に見て

いるのは天塩地方だけで、後は必要な時に必要なところに限って見るだけで、網羅的には目を通していません。

(質問者2)

先生、やはりあちらの方詳しいようですが、あのついでに聞きたいのですが、アイヌ民族がどこにどのくらい住んでいて、点在していたという話はおおよそですよ、聞いたことはあるのですが、そちらの方、先生の方の沿岸地帯にアイヌ民族はいたのでしょうか。

(講師)

勿論いたのです。河野さんの聞き取りには随分たくさん出てきます。彼は必ずアイヌの人たちの現状をしっかりと聞き取っています。それで先ほど飛ばしたけれど、羽幌のところなどもアイヌの人たちが最近まで原野の何処々々に何戸住んでいたとか、去年まで住んでいたとか、今はもうなくなったとか、それから例えば古い時代にはアイヌの人たちが渡し守をやっていたとか、とにかく、行った先々でちゃんと調べています。

(質問者2)

石狩はそうではないでしょうか。

(講師)

石狩の詳しいことは知りません。石狩の部分は見てませんので。

(質問者2)

詳しいことはわからないということですか。混在していたというか。

(講師)

ええ、もうそうです。アイヌの人たちだけで集落を形成することは、この時代になると、少なくともこの沿岸ではありません。

(質問者2)

大体何人くらいということは分かるのですね。

(講師)

道庁とか開拓使の郡単位の統計はありますけども、村ごとのはこの時に河野さんが行って調べた役場などの資料の中に断片的には出てきますが、それから刊本になっている『(北海道) 殖民状況報文』ですね、あれなんかには出てきますけども、それは網羅的なものではないです。

(質問者2)

混血というと語弊がありますが、そういう人もいたのですか。

(講師)

それはもうそうではないですか。それはある程度分かります。先ほど言いましたが、明治3年から4年にかけて、開拓使が各藩に支配地の状況調査をやって報告書を出していますでしょう。それに今お知りになりたいようなことが断片的に出てきます。というのは今はもう個人情報保護に関するため、見れませんが、戸籍の前身となるような家ごとの名前とか年齢とか男女別とか出てきますでしょう。そうするとそれらからある程度分かると思います。

(質問者2)

それについてと言っては悪いのですが、いつだったかお尋ねしたことがあるのですが、河野先生がまとめられた道史、『北海道史』（講師：大正のですね。）、これは50年記念、それ以降のことは詳しくはあるのですか。（講師：あるのですかというのは何のことですか。）先生が書いたものもあるけどもね、60周年記念くらいのはその後あるのでしょうか。

（講師）

いや、その後は昭和10年代に『新撰北海道史』という、膨大なのがありますね。そして後は戦後の『新北海道史』ということになります。河野さんの後も、河野さんの調査データはその時々の編集にも役立っているのです。（質問者2：今手がけている...）いえいえ、その後の『新撰北海道史』などの編集の時にも河野さんのデータが活かされているという、そういうことです。（質問者2：フィールドノートとかね。）時間がありませんので、そこくらいで失礼いたします。

（質問者3）

一ついいですか。関先生の貴重な経験から河野常吉さんの「フィールドノート」についての紹介をされまして大変興味深く勉強させていただきました。資料の所在、資料の読み方、どう読むのか、どういう切り口で読んでいったらいいのか、これから我々が北海道史研究をしていく、そういう問題意識や研究方法、姿勢といったものを先生の話から教えていただきました。本当に大変ですね。勉強になって、今日は充実した気持ちで帰れるのではないかと思っています。そして渡辺渡さんの鯨漁ですか、もっと具体的にさらに肉の加工の仕方とか、そういうような話も書いてあるというようなことですが、もっともっとお話を聞きたかったのですが、想像力を掻き立てられまして本当に興味深く楽しく、また有意義に勉強させていただきました。今日はどうもありがとうございました。

（講師）

何かお役に立ったら幸いです。それから渡辺の鯨のことは『羽幌町史』、新しい方の町史に捕鯨のことを少し書いておきました。

【講師プロフィール】

1936年苫前町生まれ。北海道大学文学部史学科卒、北海道立羽幌高等学校教諭、北海道・百年建設事務所研究職員を経て、1971年より北海道開拓記念館研究職員。1992年より同館学芸部長。1996年より同館特別学芸員。

共著に『北海道の風土と歴史』（山川出版社）1977、『明治・大正図誌—北海道』（筑摩書房）1978、『北海道の歴史』（山川出版社）、『近代北海道史研究所説』（北海道大学図書刊行会）、『北海道の歴史 下（近代・現代編）』（北海道新聞社）など。

現在、北海道史研究協議会常任幹事。ライマンコレクション保存協会委員会常任委員、北海道マサチューセッツ協会（HOMAS）理事

市町村史の編纂：利尻町史、利尻富士町史、羽幌町史・苫前町史などの留萌管内の市町村史など多数。現在は、旭川市史の編纂に携わっておられます。

<配付資料>

「河野常吉のフィールドノートと地域史研究」

関 秀志

はじめに

1. 河野常吉経歴と業績

〔資料1〕

(1) 主な文献

- ①高倉新一郎『北海道史の歴史－主要文献とその著者たち－』（昭和39年）
- ②北海道総務部文書課『開拓につくした人びと 8文化の黎明 下』（昭和42年）
- ③高倉新一郎『河野常吉著作集の監修に当たって』（『河野常吉著作集 1』（昭和49年）
- ④石村義典『評伝 河野常吉』（平成10年）

(2) 北海道調査の巨人松浦武四郎と河野常吉

2. 道立図書館所蔵の「河野常吉資料」とフィールドノート(野帳)

(1) 殖民状況調査と「報文」の刊行(明治27年北海道事業手、同35年解任、拓殖に関する調査囑託)

明治28年石狩・胆振・渡島・後志国調査、明治29年根室・北見国調査、明治30年天塩国調査

明治31年釧路・十勝・日高国調査 『北海道殖民状況報文 根室国』『同 北見国』刊行

明治32年渡島・後志国調査 『北海道殖民状況報文 日高国』刊行

明治33年渡島・根室・千島国調査 『北海道殖民状況報文 釧路国』刊行

明治34年小樽・岩内・寿都支庁調査 『北海道殖民状況報文 十勝国』『北千島調査報文』刊行

(2) フィールドノート(野帳)とその内容－殖民状況調査期を中心に

〔資料2〕

○道立図書館『北の資料 11 ー特集 河野常吉資料目録ー』

①聴き取り調査のメモ

②郡役所・戸長役場・警察署(巡查駐在所)・漁業組合等の記録のメモ

3. フィールドノートと地域史研究－天塩国の例－

(1) 調査の時期とノート

①明治30年9月12日小樽発・増毛着～調査～11月28日焼尻発・小樽着

②○『明治三十年天塩国出張中 日記帳』(1,025)

○『天塩国調査 第一 増毛市街地』(1,026)、9月13日～24日(別荘村・岩尾村を含む)

○『天塩国調査 第二 増毛市街、暑寒沢村、増毛村、舎熊村、阿分村』(1,027)、10月7日～15日

○『天塩国調査 第三 焼尻島、天売島(自明治三十年九月二十六日、至十月六日)』(1,028)

○『天塩国調査 第四 明治三十年十月、天塩国留萌郡調査 礼受村、留萌市街地、同殖民原野、三泊村、天登雁村、天塩国(明治三十年秋)訪問者名簿』(1,023)、

10月157日～30日

- 『天塩国調査 第五 鬼鹿、力昼村第五村、苫前村、羽幌村、遠別村、天塩村、幌延村、宗谷村』(1,024)、10月30日～11月25日 **【資料3】**

4. ノートの史料的价值

- (1) 幕末～明治30年の地域史(和人社会の成立とアイヌ社会崩壊)研究の一級史料
- (2) 『北海道殖民状況報文』等河野常吉が編集に係わった道庁出版物の基礎データ
- (3) 歴史家河野常吉の地域史調査研究の方法・問題意識の理解

[資料1] 河野常吉の略年譜と参考文献(北海道総務部行政資料課『北海道開拓功労者関係資料集録 上』昭和46年3月)(添付省略)

[資料2] フィールドノート(野帳)とその内容—殖民状況調査期を中心に(道立図書館『北の資料 11 —特集 河野常吉資料目録—』)(添付省略)

[資料3] 河野常吉野帳[天塩国調査 第五](苫前村・羽幌村の一部) 明治30年11月(道立図書館所蔵)(35ページから添付)

○吉野(信濃)其の坂上(信)
松山(吉野)

一 櫻中(吉野) (吉野)

一 二毛(吉野) (吉野)
中(吉野) (吉野)

○ 松(吉野) (吉野)
親(吉野) (吉野)

○ 吉野(信濃)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

○ 吉野(信濃)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

吉野

○ 吉野(信濃)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

一 吉野(信濃) (吉野)

又總持の... 相... 記...

一、...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

此... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

一、... 記... 記... 記...

そのうち... 代官... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

一、百二十人... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

代官... 代官... 代官...

此書の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

出巻人

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

此の巻の初巻の中

十の部内... (Vertical text on the far right edge)

今... (Vertical text, second from right)

水戸... (Vertical text, third from right)

事... (Small vertical text)

... (Small vertical text)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle left)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text, left side)

... (Vertical text on the right edge of the lower page)

... (Vertical text on the right edge of the lower page)

... (Vertical text, upper right)

... (Vertical text, upper right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

... (Vertical text, middle right)

鏡床 (運元丸) 三十三才
枕木 三十三才

○古母列五才

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

一、古田 (古田) 古田 (古田)

○八代若八

中西 (中西)

一、八代 (八代) 八代 (八代)

一、八代 (八代) 八代 (八代)

一、八代 (八代) 八代 (八代)

一、八代 (八代) 八代 (八代)

一、八代 (八代) 八代 (八代)

吳打更傳相想之... 鏡床 (運元丸) 三十三才

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

〇合内... 〇合内... 〇合内...

一、庄園の指入承継人多し、但し指入りし後期
物入の指入指入り

右指入主を因らぬ却り指入り主の指入り人なり

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

一、庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

○庄園の指入承継は、今一傳入の世に止りて又

有
東山町商店、地味之土地、
号無シテモ

① 本町村花
住居人、名物、
（名物の品類）

（名物の品類、
名物の品類）

② 佐藤平次

佐藤平次、
佐藤平次、

佐藤

③ 佐藤平次
（南郷）
是の地、
是の地

野宮幸次
（村花）
是の地

又、
又、

又、
又、

人

又、
又、

又、
又、

又、

○ 佐藤

一 米一俵、
一 米一俵、

一 米一俵、
一 米一俵、

一 米一俵、
一 米一俵、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

佐藤

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

◎ 佐藤平次

市井地

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

一 佐藤平次、
一 佐藤平次、

「資料で語る北海道の歴史」講演会（第3回：10月27日（土））

講師：高木 崇世芝氏

テーマ：古地図と地域史研究

皆さんこんにちは、ただいま紹介頂きました高木崇世芝です。今日はこのように大勢の方々においで頂き、たいへん緊張しております。皆さんのお役に立つような話しができるかどうか不安ですが、レジュメにそって話したいと思います。

私には「古地図と地域史研究」というテーマが与えられましたが、地域史に関わる古地図の話は今回が初めてです。従来はもっぱら北海道全体を描いた地図、あるいはカラフト島や千島諸島を含めた北方図といわれる地図について話しをしてきました。今日は地域史研究が主題ですので地域図を中心に話します。お聴き頂きたいと思います。

1 古地図研究の近年の動向

古地図研究というのは、明治中頃から全国的に研究が行われてきました。その研究の傾向は変遷史が中心でありました。これは、日本図の研究も、世界図の研究も同様でした。そして北海道においても、やはり変遷を主とするものでした。簡単にいいますと、いつ頃、どんな図形の図が出来たのか、誰が作成したのか、それが時代を経てどういう図形に変わっていき、どのように新しい地図の誕生となるのか、というような研究でした。戦後もこの傾向は続きました。しかし、昭和40年代くらいから、個々の地図をもっと詳細に分析してみるというふうに変ってきました。北海道でも昭和50年代から徐々に研究がすすみ論文も数多く出ております。レジュメの後ろにある文献一覧を参照してください。

もう少し、全国の研究傾向について話してみたいと思います。まず荘園図というものがあります。奈良、平安、鎌倉、室町時代にかけて数多くの荘園図というものが作成され、現在も多く残っており、古くから研究されてきました。近年は荘園図の研究は詳細を極め、現在の地形図の中に当てはめていくというたいへん困難な作業を通して解明がすすめられています。さらに昭和50年代に入って急速に研究がすすんだのが国絵図といわれるものです。国絵図というのは、江戸幕府が慶長、正保、元禄、天保と4度にわたって全国の大名に命じて作成させた極大型図で、松前藩も勿論作成し提出しています。この国絵図は古くから知られていましたが、記録のあいまいさもあって殆んど研究されていませんでした。現在は国絵図研究会も組織され、全国規模で研究がすすめられています。平成17年7月、国絵図研究会編の『国絵図の世界』という分厚い立派な本が発行されました。私もすぐ購入して読みました。この本には松前藩作成の事項が1頁も載っていないのです。これでは国絵図作成に松前藩（北海道）は関わらなかったということになります。びっくりしました。私はこの本に深く関わり、国絵図研究の第一人者といわれる大学教授の方に手紙を出しました。しばらくして丁寧なお手紙を頂き、「松前藩の事項を書く人が見つからなかったのです」と書かれておりました。まあこれは余談ですが。

とにかく現在の国絵図の研究は、すごい一言です。まず国絵図そのものが全国各地から続々と発見・公表され、関係する記録も諸藩で作成したものが数多く見つかったのです。幕府に提出した正本（しょうほん、または、せいほん）もあれば、藩が手元に置いた控図もあり、さらに控図を基にして修正した改訂図などもあります。中には慶長、正保、元禄、天保の全て揃う国もあるのです。うらやましいですね。松前藩の場合、元禄国絵図の模写図、天保国絵図の正本が現存しますが、記録は断片的なものより知られていません。

ということで、地図の変遷史から個々の地図を深く読み取って多面的に分析する研究になってきました。一枚の古地図から文書や記録では解明できないものをいかに解読するかということに力点が置かれています。そして、従来のように記録文書の補助として扱うのではなく、ひとつの独立した資料としてみることを重視するようになってきました。具体的に7点ほど項目を挙げてみました。

- ① 作成された時期やその目的を探る。
- ② 伝来の経過を探る。
- ③ 地名や記載文を読み解く。
- ④ 地形や風景を読み解く。
- ⑤ 街並や施設を読み解く。
- ⑥ 同系統図を比較して変遷を読み解く。
- ⑦ 関係する文書・記録を併用する。

2 古地図研究の視点

一番目は、「古地図の一般的現象」というものです。これは、古地図研究の第一人者であった大学教授・海野一隆氏が平成5年に発表されたものです。

- ① 同系後劣～系統を同じくする地図群の中で、誤脱・退化の著しいものほど、系譜的には後の作品である。
- ② 旧態残留～たいていの地図は、既存の作品を参考にしているので、丹念に調べると、どこかに古い作品の痕跡がある。
- ③ 多系併存～地図は一般的に進化するとは限らず、系統を異にする作品が、同時に並行して行われる。
- ④ 精亡粗残～精細な内容の作品ほど伝わりにくく、粗略な作品は次から次へと写されて、はるか後代まで存続する。

二番目に「古地図の分類」について話します。今日は木版図については話しません。なぜかといいますと北海道の江戸時代の木版地図は僅か30点足らずだからです。今日はもっぱら手書き図について話しをすすめます。

手書き図は大きく三つに分類します。まず①自筆図です。作者自身が直接作成した図です。意外と残っているものです。古川古松軒の自筆図は函館市中央図書館にあります。図中にびっしりと蝦夷地の地誌が記載されていて興味深いものです。松前藩士・加藤肩吾図は北海道大学附属図書館にあり、寛政3年（1791）頃の作成と考えられます。近藤重蔵自筆図は東京の三井文庫にあり、秦檜丸自筆図は京都大学総合博物館に保管されていま

す。また、今井八九郎のものは東京国立博物館に所蔵され、佐々木利和氏の研究発表があります。伊勢型紙の販売商人の沖正蔵（号は安海）の自筆図は北海道大学附属図書館と函館市中央図書館の二ヶ所にあります。私は鈴鹿市の悟真寺を訪ねて沖正蔵の墓碑を拝見しました。墓碑銘（漢文）には「安政3年、蝦夷地図を作成した」と明記されています。

次は②写図です。自筆図から転写されて多くの人々に写し継がれてきた図です。これが現存する地図として最も多いものです。いま私たちが図書館や博物館・郷土館などで見られるのは殆んどこの写図です。最後は③模写図です。勿論、模写図も写図なのですが、私は明治末期から図書館や博物館などが、歴史資料として古い写図を新しく写し直した図を模写図ということにしています。そうでないと、江戸期の写しと近年の写しとの区別がつかず混同するからです。道内では函館市中央図書館、北海道大学附属図書館、北海道立図書館が模写図をたくさん所蔵しています。

三番目に「古地図研究の基本」について話します。①最良の写図を探す。②同系統の地図を出来るだけ多く集め、内容の比較検討をする。最近では市町村史でも江戸期の古地図が利用されることが多くなりました。地元の様子や古地図にどのように描かれているかということで地図は重要な資料です。地名は勿論のこと地域の様子や施設などが描かれている図もあります。しかし、文字の間違いがあったり、全く抜けていることがあったりするわけですから、いかに数多くみて役立つ図を探すかということが必要になります。③該当する図の前後に作成された図も検討する。④およその作成年代と写された年代を推定する。古地図の作成年代を確定することは難しいことです。したがって多くの図を比較検討して、作成時期を慎重に判断するしか方法はありません。また図中に年記が記入されていてもそれは写した年であって作成年とは限りません。この作成年と写した年をきちんと区別しないと間違いをおかすことがあります。

3 古地図はどこにあるか

それでは最良の図を探すのはわかるが、どこに行けばそんな古地図を閲覧できるのか、ということになります。古地図の所蔵品は大きく二つに分類できます。一つは「伝来図」といわれるものです。古くから一ヶ所にまとまって伝わった図です。江戸時代であれば諸藩が所蔵していた図、または大名家が持っていた図などです。明治に入ると開拓使の役人が所持していたものが挙げられます。もう一つは「収集図」です。これは、図書館、博物館、資料館などが、長い年月をかけて寄贈、寄託、購入、模写などで集めた図です。道内で北方図を多数所蔵するのは、函館市中央図書館と北海道大学附属図書館です。ついで北海道立図書館、そして札幌市中央図書館です。道外では国立公文書館、国立国会図書館でしょうか。

北方に関する伝来図にはどのようなものがあるか、一覧にしてみました。

I 行政機関

- ① 紅葉山文庫本～国立公文書館、国立国会図書館、静岡県立中央図書館
- ② 外務省引継文書～東京大学史料編纂所、外務省外交資料館
- ③ 内務省引継文書～東京大学史料編纂所

④ 開拓使本～北海道大学附属図書館、北海道立図書館、北海道立文書館

紅葉山文庫本とは江戸幕府の所蔵本です。国立公文書館が最も多く所蔵しますが、明治になって国立国会図書館にも少し移管されています。内務省引継文書のなかの古地図は1963点あり、そのうち北海道関係図は104点です。なぜ、内務省に多くの地図が所蔵されていたかといいますと、明治になって地誌編纂を計画し、また各地の地図を何点も刊行しているからです。そのために多くの地図を収集したのですね、私はまだ一部より閲覧しておりません。開拓使旧蔵図は北海道庁から北海道大学附属図書館に移管されて今に至っているのは皆さんご存知の通りです。

II 東北諸藩

- ① 津軽藩～国文学研究資料館、弘前市立弘前図書館
- ② 南部藩～盛岡市中央公民館、八戸市立図書館
- ③ 仙台藩～宮城県図書館、斎藤報恩会図書部、仙台藩白老元陣屋資料館
- ④ 秋田藩～秋田県公文書館、千秋文庫博物館
- ⑤ 庄内藩～致道博物館、鶴岡市立図書館 *藩関係地図は不詳
- ⑥ 会津藩～会津若松市立図書館 *藩関係地図は不詳

江戸幕府は、蝦夷地を直轄地にした寛政11年(1799)以降、東北諸藩に蝦夷地やカラフト島南部、クナシリ・エトロフ島を警備させました。その負担は実に大きなものだったようです。そのため諸藩は文化期および安政期に警備を命令されましたが、日ごろから蝦夷地に関わる資料を集め、また作成して所持していたのです。現在も多くの警備関係地図類を所蔵しています。

III 大名・幕臣など

- ① 井伊家文書(彦根藩主)～彦根城博物館
- ② 水野家文書(浜松藩主)～東京都立大学附属図書館
- ③ 鷹見泉石(古河藩家老)～古河歴史博物館
- ④ 近藤重蔵(北方探検家)～東京大学史料編纂所
- ⑤ 梨本弥五郎(箱館奉行役人)～国立国会図書館

蝦夷地に関心をもって北方図や関係書物を所持した大名は、東北六藩以外にも何人もいます。井伊家文書の北方図は家臣の寄贈品が多いのですが、20数点あります。水野家文書は天保の改革で名高い水野忠邦の旧蔵書で、蝦夷図、カラフト島図などがあります。鷹見泉石は自ら何枚も北方図を写したほど地図の収集・研究に関心をもった人物です。近藤重蔵はエトロフ島の開発に尽力し、西蝦夷地の内陸部を調査しました。所蔵していた北方関係図は文書とともに国の重要文化財に指定されていますが、北方図は殆んど複製され容易に見ることが出来るようになりました。梨本弥五郎旧蔵図は全部で57点あります。すべて北方関係図ですが、中には梨本家の履歴記録も含まれています。

IV 場所請負人

- ① 飛騨屋武川久兵衛～岐阜県歴史資料館
- ② 阿部屋村山伝兵衛～北海道開拓記念館、北海道大学附属図書館

場所請負人は大勢いたのですが、その旧蔵図はどうなったのか殆んど判りません。しか

し、飛騨屋と阿部屋の旧蔵図は現存し今に見ることができます。とくに飛騨屋旧蔵図には他所では見られない見事な北方図が多数あります。

V 個人

- ① 稲垣定毅（地理学者）～津市図書館
- ② 今井八九郎（松前藩士・測量家）～東京国立博物館、北海道大学附属図書館、早稲田大学中央図書館
- ③ 福土成豊（開拓使地理課）～北海道大学附属図書館、北海道立文書館
- ④ 高畑利宜（開拓使・北海道庁）～滝川郷土館、北海道立図書館

稲垣定毅（さだよし）は、なじみがないと思いますが、伊勢国の地理学者で、世界図や世界地理書を刊行しています。近年その蔵書が寄贈されたのですが、蝦夷図やロシア図も含まれています。今井八九郎は間宮林蔵から測量術を学んだといわれる人物です。東京国立博物館に今井家から寄贈された数多くの草稿、完成図があります。福土、高畑は開拓使で活躍した有名な人物ですね。福土は千島にも出張して多くの千島関係図を作成しました。高畑旧蔵図には石狩川上流図など貴重なものがあるようですが、私はまだ閲覧したことがなく、機会があったらぜひ拝見したいと思っています。

4 北海道における地域図

それでは、北海道に関わる地域図について述べます。「地域図」とは、ある地域を描写した図ということですが、これは数多く現存します。例えば、シャマニ図といえ、現在の様似町周辺を描いた図ですし、江指図とは現在の江差市街図です。なかには内浦湾沿岸を描いた広範囲の図もあります。これらの特徴は北海道全体図では描写できない、その地域の細かな様子が描かれていることです。これに記録や古文書とつき合わせることで、当時の地域がより具体的で正確に把握できるのだと思います。どのような地域図があるのかいくつか例を挙げてみました。

I 地域図

① 場所図

場所請負制度は長く続いたのですから、数多くの場所図が残っています。「東蝦夷地ウス場所絵図面」は東北大学附属図書館所蔵ですが、詳しい図です。ウス会所や休み所が描かれ、夏鮭・秋鱒の産物もあり、新道・旧道も見えます。また場所の両端には「境杭」があります。この他、一つの場所だけでなく、複数の場所を載せた図もあります。「東蝦夷地クスリより箱館迄廿六場所図」がそれです。同様の図が他にも所蔵されていますから、やはり需要があったのですね。因みに当時の蝦夷地には一里塚はなかったようですが、幕末には「一里杭」といわれる杭が立てられたようで、地図に描かれていることがあります。

② 広範囲の地域図

ここでは「蝦夷地里数書入地図」を取り挙げてみます。天保2年（1831）頃、今井八九郎が作成したものです。2巻からなり合わせて42mほどの長い巻物です。当代きっての測量家で作ったものですから素晴らしい図です。後に具体的に触れます。

「蝦夷南海岸図」は4枚続きの図です。フシコヘツから箱館・木古内付近までの沿岸を描いた図です。図名や枚数は異なりますが、函館市中央図書館、北海道大学附属図書館、国立国会図書館、盛岡市中央公民館にもあり、多くの人々に写し継がれたのでしよう。

③ 津軽海峡図

「津軽海峡」という言葉は江戸時代にはありません。この言葉は明治以降に付けられました。ですから津軽海峡図には名称の付いた図はあまりないのです。津軽海峡の名称は、1660年代にヨーロッパ製の地図に「ツングラ」または「ツングル」海峡と記載されたのが古い例であり、有名なシーボルトの『NIPPON』（1832～52年刊）には「Tsugaru海峡」とあります。青森県立図書館、岩手県立図書館に大型図があり、函館市中央図書館、弘前図書館には小型図があります。北海道立図書館には題簽「南部津軽松前海岸図」という図があり、苦心して付けられた図名です。江戸期には、「海、灘、瀬戸」などの言葉が使われていました。

④ 離島図

奥尻島、利尻島、礼文島など北海道にはたくさん離島があります。これら離島図も数多くあります。「利尻島礼文島沿岸測量製図」は天保5年（1834）に今井八九郎が作った図ですがとても正確な図です。現在の5万分の1地形図と比較できるほどです。「リイシリ島略図」は利尻町立博物館にあるのですが、秋田藩が警備のとき使用したもので美しい図です。奥尻島図は少なく「西地ヲクシリ嶋略図」というのが東京大学史料編纂所にありました。また、シコタン島図もいくつか現存します。

⑤ 海岸浅深図

「海岸浅深図」については、近年になって論文が発表されて私は初めて知りました。嘉永2年（1849）に幕府が全国の海岸線を持つ藩に命じて作成させたものです。海岸から沖合いに向けて、一定の距離ごとに海底の深さを計測させ、これを図中に記載した図です。当時、日本近海に外国船（主として捕鯨船）が頻繁に現われるようになり、その警備の一環として作成させたのです。いままで何点か見たのですが、ただ漫然とみていました。箱館周辺図に記載される図が多いのですが、過日、仙台藩白老元陣屋資料館を訪ねたとき拝見した蝦夷地図には、蝦夷地の海岸線に数多く浅深測量のデータが記載されていて驚きました。松前藩はきちんと各地で海の深さを計測していたのですね。このような図は函館市中央図書館や宮城県図書館にもあります。これからも見つかると思います。ぜひ留意してほしい図です。

II 城下図・村絵図

「蝦夷地の三湊」といわれた松前・箱館・江差の図がたくさん残っています。最も多いのが箱館図です。函館市中央図書館には、江戸期の写図だけで30点もあります。箱館山を大きく描く図、箱館山から周辺地域に広がった図、市街平面図などです。松前城下図の代表的な図を挙げますと、秦檜丸が文化3年（1806）に作成した「松前市中地図・江刺市中地図」の2枚組です。どちらも縦1m以上、横1.6から2mほどの大きな素晴らしい図です。この組図は国文学研究資料館、秋田県公文書館、千

秋文庫博物館などに現存します。松前図は箱館図に比較すると意外に少ないように思われます。最も数の少ないのが江差図です。秦檜丸作成図以外では国立公文書館所蔵図など僅か4点くらいより見たことがありません。

Ⅲ 河川図

河川図も少ないものです。古い図では飛騨屋久兵衛旧蔵の「唐桧伐出山内図」というのが岐阜県歴史資料館にあります。模写図は北海道大学附属図書館にあって、これは従来からよく知られています。阿部屋村山家旧蔵の「石狩川流域図」は札幌市立藻岩北小学校に所蔵されますが、私はまだ見たことがありません。「石狩川川筋図・天塩川川筋図」は近藤重蔵が文化4年（1807）に実地調査のさい作成した図です。「太櫓川川筋図」は現在、北海道立アイヌ民族文化研究センター（山田秀三文庫）に所蔵されます。どんな目的で作成されたのか判りませんが、とても珍しい図です。

あと2、3点は知られていますが、とにかく北海道の江戸期の河川図は他の図に比べて現存が非常に少ないようです。

Ⅳ 陣立図・陣屋図

文化期以降、東北の諸藩は幕命によって蝦夷地やその周辺の警備を実施しました。そのとき戦いを想定した隊列を組みます。その隊列の構えを図式化したものを陣立図といいます。函館市中央図書館にある図は文化4年（1807）に七重浜で行った陣立で、人物の絵で表現したものです。弘前図書館のものは、同年に若年寄、堀田正敦が松前城下において謁見した陣立図です。弘前図書館には「江指御固備之図」という図もあり、江差でも陣立を実施したことがわかります。そのほかにもいくつかの陣立図が残っています。

次に陣屋図です。やはり蝦夷地やカラフト島、クナシリ・エトロフ島に東北諸藩が警備のため陣屋を建てました。その陣屋図や陣屋を中心とする周辺図がたくさん残っています。仙台藩白老元陣屋資料館にもあります。会津藩がカラフト島に建築した陣屋図、南部藩が箱館に建てた陣屋図、さらにそのための建築設計図は、函館市中央図書館、仙台市にある斎藤報恩会、弘前図書館などにたくさん所蔵されています。このような諸藩の警備に関わる陣立図や陣屋図については、個々の陣屋については既にいくつか論文もありますが、全体的な研究はこれからでしょう。

Ⅴ 風景図

地図の中には絵図といわれるものがありますね。絵の要素が強い絵画的地図とでもいうべきものでしょうか。しかし、江戸時代は地図と絵図の区別はしていません。そこで、ここでは風景図として分類しておきます。要は風景の中に地名や書き入れのあるものを指します。風景図の形態で最も多いのは卷子本といわれる巻物状のもので、ほかに折帖、冊子、屏風があります。

まず冊子、折帖でよく知られているのが、目賀田守蔭が安政6年（1859）に作成した「延叙歴検真図・北延叙歴検真図」（全12冊）ですね。道内では函館市中央図書館に所蔵されます。これを明治4年（1871）になって改めて別の絵図として描き直したのが北海道大学附属図書館にある「北海道歴検図」（全28帖）です。どちら

も道内の市町村史の口絵によく使用されています。巻物では北海道立図書館所蔵の「松前東蝦夷地道中図絵」(全2巻)がよく知られています。これは文化6年(1809)に南部藩士、楢山隆福が作成した図巻で、クナシリ島から箱館を経て当別に至る各地の施設を詳細に描写したものです。会所や番屋など当時の施設をこれほど詳しく描いた巻物は他にありません。自筆本かどうか判りませんが、それに近いものといえましょう。道立図書館に入ったのは昭和30年代後半だと思いますが、同じものの模写本は、函館市中央図書館と岩手県立図書館にあります。「蝦夷地湊々測量の図」(全2巻)も特徴ある巻物です。やはり文化年間に東蝦夷地の会所の位置を地図に記入したものです。これには上部に紀行文が記載されています。最後は屏風です。現在知られているもので地名が入った絵図としての屏風は、函館市中央図書館の「東蝦夷地屏風」(全8雙)だけだと思います。8雙全部を並べると34mにもなり、茂辺地(現北斗市)からノシャップ岬(現根室市)までの風景が描かれそれは見事なものです。地名、山名、施設名などは239記入されています。この屏風は秦檜丸自筆で、文化4年(1807)冬に完成し、幕府(箱館奉行)に納められたものです。

5 研究書・論文と古地図一覧

私の地域図に関する話しも終わりに近づきました。ここには昭和50年以降の地域図に関わる著作・論文で目についたものを挙げておきました。研究書は9冊、論文は33を載せました。ともに優れた論考が多く、今後の研究に大いに役立つものです。

北海道立図書館の古地図一覧も載せました。江戸期から明治末年までの主として一枚物です。切図形式の地形図は載せていません。長い年月をかけて数多くの古地図が収集・架蔵されました。私は全てを閲覧したわけではありませんが、貴重図としては、レイモンド・服部氏が寄贈した文化年間の「蝦夷図」、松浦武二郎自筆で安政7年(1860)作成の「樺太州全図」、金田一京助旧蔵の木版図「文化改正拾遺日本北地全図」、今井八九郎の「松前江差周辺図」、元禄13年(1700)の年記がある大型図「桧山管内図」、目賀田守蔭の「北延叙地図」など多数あります。明治期のものでは明治6年(1873)の「札幌郡西部図」や「樺太国楠溪海岸図」(銅版)などがあります。

また日本図では、明治4年に刊行された「大日本四神全図」があります。橋本玉蘭斎(五雲亭貞秀とも)という横浜浮世絵師が描いた有名なもので、北方地域が詳細に描写されているのが特色であり、稀覯図です。

6 参考古地図

今日は参考として近藤重蔵の旧蔵図を何点か持参しました。これらはいずれも東京大学史料編纂所に所蔵されるものですが、現在は復刻されていますので、このように誰でも見られるようになりありがたいですね。近藤重蔵については初めにも触れましたが、寛政10年(1798)から文化4年(1807)までに数度、蝦夷地からエトロフ島に渡り、同島の開発や蝦夷地の内陸部を調査した人物です。このように何枚もの蝦夷地の地域図があるのは、当時の蝦夷地を知るうえで貴重なものです。また、作成された年代もほぼ寛政

期から文化期に限定されますので年代推定も容易です。

最後に3枚の地図を入れておきましたのでこれを説明します。

1枚目は「蝦夷地里数書入地図」です。天保2年(1831)の文字が書かれています。松前藩士、今井八九郎の自筆図と思われます。ご覧のとおり詳細な図で、各地点の距離が正確に記入されていて、明らかに実測によるものであることが判ります。また和人地だけです家数も記入されていますし、村や場所の境も明確に記載されています。この図は蝦夷地全域の海岸線が描かれているのですから、これがカラーで復刻されたらどれほど北方史研究や地名調査に役立つか計り知れません。私は早稲田大学中央図書館で2度閲覧・調査させて頂きました。元は折帖であつたらしく、後に巻物に仕立直されたようです。

2枚目は「津軽海峡図」、函館市中央図書館所蔵図です。このように対岸の様子を詳しく載せ、航路も多数引かれています。昔からこの海峡には白神ノ潮、中ノ潮、竜飛ノ潮という三つの激流がありました。古川古松軒の著書に『東遊雑記』という有名な本があります。この中で、三厩から松前に渡る際、舟が木の葉のように激しく揺れる潮流の凄まじさを詳しく記しています。伊能忠敬も測量のため松前に着く予定が、舟が流されて吉岡(現福島町)に着いたのです。当時は天候や風向きの関係で数日以上も舟待ちすることはたびたびあったそうです。

3枚目は「箱館湾内測量之図」というものです。これも函館市中央図書館所蔵です。文久2年(1862)の写図ですが、この図が先に話した海岸浅深図です。箱館湾から遠く木古内の境まで23地点での浅深測量が記載されていますが、嘉永2年(1849)、幕命によって実測されたものです。海岸から沖合いに向けて30間、1丁、5丁、10丁、20丁、30丁の6ヶ所を計測しているのも幕府の指示通りです。

このように、地域図は実に多くの種類が現存し、その殆んどは誰でも閲覧できます。これらを多方面から調べ分析することによって、古記録、古文書からだけでは判らない史実が浮かび上がってくることがあります。ぜひ今後も古地図に関心をもって頂ければ幸いです。

長々と話してしまいました。関心をもって頂けたかどうか判りませんが、以上をもちまして終りたいと思います。お聴き頂きありがとうございました。

質問事項

① 古地図とそうでない新しい地図とは、どのように区分されているのか。

[回答] 難しい質問ですね。日本での古地図は奈良時代からあり、天平期の地図が正倉院に現存します。そして、鎌倉、室町、桃山、江戸と各時代の古地図が多数知られています。今日私が話しをしたのはもっぱら江戸時代の地図です。これらは確実に「古地図」です。もちろん明治期のものも古地図ですね。では昭和はどうでしょうか。実は地図史や地理学辞典などでも、明確な定義はしていません。たんに「年代を経た古い地図」としてあります。私は少なくとも現在から30年以上経た地図としたいところです。

② 江戸時代に測量家はどの程度いたのか、また、測量家は和算ができたと思うのだが、測量と和算の関係は。

[回答] これも難しい質問です。私には明快に答えられるか判りませんが、まず測量家のことです。先ほど国絵図の話をしました。これらは諸藩の測量家や絵図師が動員されたであろうことは疑いありません。しかし、全国的に知られた測量家は、そう多くはないはずです。皆さんご存知の伊能忠敬は全国を代表する測量家ですね。間宮林蔵は伊能忠敬の弟子として測量術を学びました。地方の測量家として私の知っている人物は新湊の石黒信由です。伊能忠敬とも会い交流しています。佐渡島には石井夏海という測量家がありましたし、米沢には絵図方を勤めた岩瀬家が知られています。北海道でよく知られている秦檜丸は伊勢国の出身ですが、測量術に優れ見事な蝦夷図を作成しました。松前藩では今井八九郎が測量家として最も知られた人物ですが、そのほかに測量のできた人物がいたかどうか判りません。

測量と和算の関係ですが、和算は江戸時代、高度に発達した数学でした。多くの和算家の業績も研究されています。これが測量や作図のための複雑な計算に活用されたことは当然のことでしょう。松前藩に和算家がいたかどうかは不明です。

それではこのへんで、本日の講演会を終了させていただきます。皆さん本日はご苦勞さまでした。

【講師プロフィール】

昭和13年八雲町の出身。釧路・渡島管内の小・中学校の教師を務め、現在は札幌市に居住。

本道における古地図研究者として知られる。古地図研究は、高校時代に江戸時代の北海道が奇妙な形をしていることに興味をもったのがきっかけということで、以来、全国をまわり様々な調査の傍ら、自らも数多くの貴重な北方図を所有し、郷土史の研究にも力を注いでおられます。

近年は、各地で講演活動を行うなど、多忙な日々を送られており、平成19年9月～10月に当館で開催した展示（「木版蝦夷地図にみる北海道」）においても多大なお力添えをいただきました。

著作は、「松浦武四郎関係文献目録」（北海道出版企画センター）、「北海道の地名関係文献目録」（サッポロ堂書店）、「北海道の古地図」（五稜郭タワー株式会社）など多数。

現在、北海道文化財保護協会、北海道史研究協議会、アイヌ語地名研究会、松浦武四郎研究会等に所属され、平成16年度には函館文化会より、道南の郷土史研究に優れた業績をあげたとして「神山茂賞」が贈られています。

< 配付資料 >

北海道立図書館江別移転40周年記念 資料で語る北海道の歴史

古地図と地域史研究

高木崇世芝

平成19年10月27日(土)

北海道立図書館研修室

1 古地図研究の近年の動向

I 地図の変遷史から個々の古地図を解読する方向へ。

II 従来からの文書の補助としてではなく、独立した記録資料としてみる。

- ① 作成された時期やその目的を探る。
- ② 伝来の経過を探る。
- ③ 地名や記載文を読み解く。
- ④ 地形や風景を読み解く。
- ⑤ 街並や施設を読み解く。
- ⑥ 同系統図を比較して変遷を読み解く。
- ⑦ 関係する文書・記録を併用する。

2 古地図研究の視点

I 古地図の一般的現象（「古地図研究の過去・現在・未来」海野一隆・平成5年）

- ① 同系後劣～系統を同じくする地図群の中で、誤脱・退化の著しいものほど、系譜的には後の作品である。
- ② 旧態残留～たいていの地図は、既存の作品を参考にしているので、丹念に調べると、どこかに古い作品の痕跡がある。
- ③ 多系併存～地図は一般的に進化するとは限らず、系統を異にする作品が、同時に並行して行われる。
- ④ 精亡粗残～精細な内容の作品ほど伝わりにくく、粗略な作品は次から次へと写されて、はるか後代まで存続する。

II 古地図の分類

- ① 自筆図（作者自身の作成）～古川古松軒図、加藤肩吾図、近藤重蔵図、秦檜丸図、今井八九郎図、松浦武四郎図、沖正蔵図など。
- ② 写図（自筆図から転写された図）～もっとも多く現存し各地・各所に所蔵される。
- ③ 模写図（歴史資料として近年に写す）～北大北方資料室、函館市中央図書館、北海道立図書館などに多い。

III 古地図研究の基本

- ① 最良の写図を探し出す。
- ② 同系統の地図を出来るだけ多く集め、内容の比較検討をする。

- ③ 該当する図の前後に作成された図も検討する。
- ④ およその作成年代と写された年代を推定する。

3 古地図はどこにあるか

伝来図～江戸期や明治期に一括まとめて伝来した図。

収集図～図書館・博物館・資料館などが長い年月の間に、寄贈・購入・模写して集めた図。

<伝来図>

I 行政機関

- ① 紅葉山文庫本～国立公文書館、国立国会図書館、静岡県立中央図書館（葵文庫）
- ② 外務省引継文書～東京大学史料編纂所、外務省外交資料館
- ③ 内務省引継文書～東京大学史料編纂所
- ④ 開拓使本～北大北方資料室、道立文書館、道立図書館北方資料室

II 東北諸藩

- ① 津軽藩～国文学研究資料館史料館、弘前市立弘前図書館
- ② 南部藩～盛岡市中央公民館、八戸市立図書館
- ③ 仙台藩～宮城県図書館、斎藤報恩会図書部（仙台市）、仙台市博物館、
仙台藩白老元陣屋資料館（白老町）
- ④ 秋田藩～秋田県公文書館、千秋文庫博物館（東京都）
- ⑤ 庄内藩～致道博物館（鶴岡市）、鶴岡市立図書館 * 藩関係地図は未確認
- ⑥ 会津藩～会津若松市立図書館 * 藩関係地図は未確認

III 大名・幕臣など

- ① 井伊家文書（彦根藩主）～彦根城博物館
- ② 水野家文書（浜松藩主）～東京都立大学附属図書館
- ③ 鷹見泉石（古河藩家老）～古河歴史博物館
- ④ 近藤重蔵（北方探検家）～東京大学史料編纂所 * 複製刊行本がある
- ⑤ 梨本弥五郎（箱館奉行役人）～国立国会図書館

IV 場所請負人

- ① 飛騨屋武川久兵衛～岐阜県歴史資料館、北大北方資料室（模写）
- ② 阿部屋村山伝兵衛～北海道開拓記念館、北大北方資料室、藻岩北小学校

V 個人

- ① 稲垣定毅（津の地理学者）～津市図書館（稲垣文庫）
- ② 今井八九郎（松前藩士・測量家）～東京国立博物館、北大北方資料室、
早稲田大学中央図書館
- ③ 福士成豊（開拓使地理課）～北大北方資料室、道立文書館、道立図書館
- ④ 高畑利宜（開拓使・北海道庁）～滝川郷土館

4 北海道における地域図 一地域図研究の多様性一

- I 地域図～最も数多く現存し、内容も多岐にわたり豊富である。

① 場所図

- 1 東蝦夷地ウス場所絵図面 <東北大附属図書館>
2 西蝦夷地石狩場所絵図 <北大北方資料室>
3 東蝦夷地クスリより箱館迄廿六場所図 <古河歴史博物館>

② 広範囲の地域図

- 1 松前東蝦夷地浦川よりシヤマニ迄之図 寛政11年 <弘前図書館>
2 蝦夷地里数書入地図(2巻)天保2年 今井八九郎<早大中央図書館>
*縦27.0cm、横(東)21.8m、(西)20.5mの詳細図
3 蝦夷南海岸図(4枚) <北大北方資料室、函館市中央図書館>

③ 津軽海峡図～江戸期には「津軽海峡」の名称はない。

- 1 田辺部通蝦夷地地図(118×196) <岩手県立図書館>
2 津軽海峡海流図(118×192) <青森県立図書館>
3 御国松前津軽船路図 <函館市中央図書館>

④ 離島図

- 1 利尻島礼文島沿岸測量製図 天保5年 今井八九郎 <東京国立博物館>
2 リイシリ島略図 秋田藩旧蔵 <利尻町立博物館>
3 西地ヲクシリ島略図 <東大史料編纂所>

⑤ 沿岸浅深図～嘉永2年、幕府より海岸線をもつ藩に作成命令がでる。

- 1 蝦夷地全図 三好監物旧蔵 <仙台藩白老元陣屋資料館>
2 箱館附近絵図 8ヶ所に記載 <宮城県図書館>
3 箱館澗内測量之図 22ヶ所に記載 <函館市中央図書館>

II 城下図・村絵図～和人地の三湊図、箱館図が最も多く現存し、江差図は少ない。

① 松前城下図

- 1 松前市中地図 秦檜丸 文化3年 <国文学研究資料館、秋田県公文書館、
106×212 千秋文庫博物館、東大史料編纂所>
2 松前分間絵図 <函館市中央図書館>
3 松前福山図 <青森県立郷土館>

② 箱館図～内容に箱館山図、箱館周辺図、箱館市街図がある。

- 1 高田屋旧蔵箱館絵図 <函館市中央図書館>
2 松前箱館全図 寛政10年 <弘前図書館>
3 分間箱館全図 享和元年 <函館市中央図書館>

③ 江差図

- 1 江刺市中地図 秦檜丸 文化3年 <国文学研究資料館、秋田県公文書館、
107×159 千秋文庫博物館、東大史料編纂所>
2 江指図 <国立公文書館「内閣文庫」>
3 江差図 <東北大附属図書館>

III 河川図～現存数は少ない。

- 1 唐桧伐出山内図 <岐阜県歴史資料館、北大北方資料室(模写)>

- *飛騨屋久兵衛所有の図で、木材切り出し用の図と思われる。2種がある。
- 2 石狩川筋図・天塩川筋図（2巻） 近藤重蔵 <東京大学史料編纂所>
*文化4年、近藤が内陸部踏査の際に作成したもの。
- 3 石狩川流域図 <札幌市立藻岩北小学校>
*村山家旧蔵図、下流から上流まで地名を詳しく載せる。
- 4 戸勝川絵図 <東京大学史料編纂所>
*流域に点在するアイヌコタンや畑作の様子を詳細に描写する。
- 5 太櫓川筋図 <道立アイヌ民族文化研究センター（山田文庫）>
*流域沿岸の様子を簡潔に描写する。

IV 陣立図・陣屋図～文化期から安政期に東北六藩が警備のために作成する。

① 陣立図

- 1 箱館七井浜佐竹右京太夫様御陣立之図 文化4年 <函館市中央図書館>
- 2 松前城下ニ於テ若御老中御備立御覧之図 文化4年 <弘前図書館>
- 3 江指御固備之図 <弘前図書館>

② 陣屋周辺図

- 1 白老元御陣屋之図 <宮城県図書館>
- 2 ソウヤ出張陣屋略絵図 <秋田県公文書館>
- 3 会津藩居小屋附近之図 <弘前図書館>

③ 陣屋建築平面図

- 1 箱館千代ヶ台御陣屋取建之図（35枚） <弘前図書館>
- 2 苦納志利諸所爾外番家絵図面（22枚） <仙台市・斎藤報恩会>
- 3 択捉国後其他警備建家図（5枚） <函館市中央図書館>

V 風景図～主として折帳、巻物、屏風などに描写される。

① 冊子・折帳

- 1 延叙歴検真図・北延叙歴検真図（12冊）安政6年作成
<東京大学総合図書館、東洋文庫、函館市中央図書館>
- 2 北海道歴検図（28冊）安政6年作成、明治4年編集 <北大北方資料室>
*両図とも目賀田守蔭の作成、各地を詳細・美しい絵図で表す。

② 巻物

- 1 松前東蝦夷地道中図絵（2巻）南部藩士・楢山隆福 文化6年<道立図書館>
*クナシリ島から箱館を経て当別に至る各地の施設を詳細に描写する。
- 2 蝦夷地湊々測量之図（2巻） 文化年間 <函館市中央図書館>
* ヤムクシナイからアンネベツまでの記録と会所・番屋の図を掲載する。

③ 屏風

- 1 東蝦夷地屏風（8雙） 秦檜丸自筆 文化4年 <函館市中央図書館>
* 茂辺地からノツシヤブ岬までの沿岸風景図、全長34mにおよぶ。

VI 明治以降の市町村図～手書き図から刊行図へ移行する時期。行政区域の拡大と進展の様子を知る手がかりとなる図もある。

5 北海道の地域図を主とした研究書・論文（昭和50年以降）

【研究書】

- 1 日本の古地図15 札幌 堀淳一編 昭52. 10 講談社
- 2 地図と写真でみる旭川歴史探訪 金巻鎮雄編 昭57. 4 総北海
- 3 函館の古地図と絵図 吉村博道編 昭63. 7 道映写真
- 4 名寄歴史地図史料集 平2. 3 市立名寄図書館
- 5 釧路の近世絵図集成 佐藤宥紹編 平4. 3 釧路市
- 6 箱館から函館へー古地図で見る都市形成の歴史 富原 章
平10. 2 函館文化会
- 7 地図にみる蝦夷地、北海道、紋別
北海道立オホーツク流氷科学センター
平14. 2
- 8 石狩川中流域の歴史地図 たきかわ歴史地図研究会編 平15. 3
- 9 古地図に見る西蝦夷地とイシカリ川筋 たきかわ歴史地図研究会編 平19. 6

【論文】

- 1 今井八九郎の蝦夷地図考<2> 佐々木利和 昭55. 7、57. 4
MUSEUM352、373
- 2 今井八九郎の事績 谷澤尚一・佐々木利和 昭55. 9 北海道の文化43
- 3 十勝平野におけるアイヌ集落の立地と人口の変遷 羽田野正隆 昭57. 1
北方文化研究14
- 4 今井八九郎の蝦夷地図考 佐々木利和 昭59. 1 松前藩と松前21
- 5 クスリ場所の絵図 佐藤宥紹 昭60. 3 釧路市立博物館紀要10
- 6 地図から見た石狩川 高倉新一郎 昭62. 8 札幌の歴史13
- 7 地図に描かれた札幌<2> 高倉新一郎 昭63. 2、63. 8
札幌の歴史14、15
- 8 福士成豊と北海道の地形図 佐藤 光 平元. 9 地図ニュース204
- 9 明治初期の静内郡絵図に関する若干の考察 平井松午・羽田野正隆 平3. 4
北海道地理65
- 10 安政2年杉浦嘉七のトカチ場所絵図 井上 寿 平3. 6
トカプチー十勝郷土研究5
- 11 第一次蝦夷地直轄以前の上川地方の古地図 平野友彦 平3. 9
旭川研究<昔と今>2
- 12 近藤重蔵「天塩川川筋図」についてのメモ 鈴木邦輝 平4. 3
名寄市郷土資料報告7
- 13 北海道古地図にうかがう上川の認識と地名 平野友彦 平6. 6
新旭川市史第1巻
- 14 秦檜丸作製の蝦夷地図 高木崇世芝 平7. 2 北海道の文化67
- 15 函館の発展と都市域拡大 玉井哲雄 平7. 3 函館市史 都市・住文化編
- 16 秋田藩勘定方「リイシリ島略図」について 西谷榮治 平7. 3 利尻研究14

- 1 7 白老元陣屋管見 佐藤宏一 平7. 3 仙台藩白老元陣屋資料館報 1
 1 8 石狩川と古地図 平野友彦 平7. 4 川と人 6
 1 9 北海道の古地図「地域図」の所在 高木崇世芝 平7. 6
 北海道史研究協議会 会報 5 6
 2 0 絵図に描かれたユウフツ 武田正哉 平8. 3 苫小牧市博物館研究報告 6
 2 1 幕末蝦夷地の絵図にみる地域情報の把握 山田志乃布 平1 2. 3
 歴史地理学 4 2 - 2
 2 2 刊行函館図の変遷 高木崇世芝 平1 3. 3 地図情報 2 0 - 4
 2 3 幕末蝦夷地の沿岸図と地域情報 山田志乃布 平1 3. 8 人文地理 5 3 - 4
 2 4 石狩川歴史地図探訪 浅田英祺 平1 3. 1 1 石狩川サミット資料集成
 2 5 地図からみた北方経営—幕末日本で作製された絵図・地図を中心に—
 山田志乃布 平1 5. 3 日本の北方地域と北東アジア
 2 6 北海道の陣屋について—仙台藩陣屋の縄張りを中心に— 石川浩治
 仙台藩厚岸出張陣屋絵図 佐藤宏一 平1 6. 3 仙台藩白老元陣屋資料館報 1 0
 2 7 古地図に見る十勝川 平1 6. 5 濤標—十勝川の川舟文化史
 2 8 室蘭図書館蔵「胆振国室蘭郡全図」について 井口利夫 平1 7. 2
 茂呂瀾 3 9
 2 9 目賀田守蔭筆「蝦夷歴検真図」について 鶴岡明美 平1 7. 3 人間文化論叢 7
 3 0 知床を紹介したいろいろな地図 高木崇世芝 平1 7. 9 地図中心 3 9 6
 3 1 『東蝦夷地屏風』と『東蝦夷地名考』 高木崇世芝 平1 7. 1 2
 アイヌ語地名研究 8
 3 2 1 9 世紀の室蘭図に見るアイヌ語地名 井口利夫 平1 8. 1 2
 アイヌ語地名研究 9
 3 3 今井八九郎の「室蘭図」< 2 > 井口利夫 平1 9. 5、1 9. 8
 伊能忠敬研究 4 8、4 9

北海道立図書館所蔵 古地図一覧

注～江戸期から明治末年までの図、明治以降の切図は除く

- 蝦夷図** (金) は金田一京助旧蔵図
- 1 蝦夷嶋之図 国絵図系略図 地—9 0
 - 2 蝦夷草紙付図(模写) 4枚(全図を欠く) 東大の模写 (金) 地—古—1 1
 - 3 松前蝦夷地一円之図 塩田硯菴 安永8年 加藤肩吾図系 (金) 地—古—1 3
 - 4 北海道(道南地方)精写図 秦檜丸図の1枚 文化5年 地—8 9
 - 5 蝦夷図 警備図 文化年間 地—古—5
 - 6 慥齋改正今蝦夷地形図 山田聯図 文化年間 (金) 地—古—2 1
 - 7 蝦夷島図 航海図 文政年間 地—古—4

8	蝦夷国全図	林子平	天明5年	「越崎所蔵」印	地—古—16
9	蝦夷地図	〃			地—古—18
10	北接古図	〃			地—古—19
11	蝦夷国全図（帙入り5枚）	〃			(金) 地—古—15
12	三国通覧図説付図（5枚）	〃			地—古—20

カラフト図

1	北延叙地図	目賀田守蔭図			(金) 地—古—12
2	樺太州全図	松浦武四郎自筆			地—910—19
3	樺太闔境之図	〃			地—910—20
4	唐太図（模写）	松浦武四郎図型			地—別—27
5	薩哈噠嶋沿海洲之図				地—910—26

千島図

1	蝦夷地図式（坤）	チュプカ図	近藤重蔵		地—古—22
2	チュプカ諸島之図（模写）	〃			地—古—23
3	蝦夷千島恵土呂府久奈尻島之図（模写）				地—別—5
4	国後島図（模写）				地—別—4
5	択捉島地図				地—230—10
6	得撫島之図				地—230—1
7	色丹島図				地—230—6
8	千嶋国色丹郡之図				地—230—5

地域図

1	松前東蝦夷地道中図絵（2巻）	榎山隆福	文化6年		210.088—MA
2	東蝦夷地道中見取図				H291.038—Hi
3	エトロフ島周廻図巻	嘉永5年			地—別—29
4	ルルモツへ・トママイ・テシホ三場所経界絵図（模写）				地—別—6
5	江差・岩内間道路開鑿之図（模写）	安政期			チ・ズ・14
6	南部津軽松前海岸図	津軽海峡図			地—別—16
7	エゾノ内：噴火湾図				地—古—37
8	利尻麓絵図				地—別—2
9	北海道図「道東地方図」	松本十郎	明治4年		地—古—39
10	北海道石狩川図（原図）	福士成豊			地—500—2

刊行日本図

1	改正日本輿地路程全図	長久保赤水	安永8年		(金) 地—古—14
2	大日本沿海要疆全図	工藤東平	嘉永7年		(金) 地—古—31
3	大日本四神全図	橋本玉蘭斎	明治4年		地—4
4	増訂大日本国郡輿地路程全図		明治4年		(金) 地—古—25
5	新訂日本全図	慶岸堂	銅版		(金) 地—107
6	大日本全図	陸軍参謀局			(金) 地—リ

刊行北方図

- | | | | | | |
|----|------------------|-------|-----------------|-----------|----------|
| 1 | 蝦夷国全図 | 林子平 | 天明5年 | (金) | 地—古—17 |
| 2 | 文化改正拾遺日本北地全図 | 文化年間 | | (金) | 地—古—24 |
| 3 | 満州魯西亜疆界図 | 嘉永6年 | | | 地—古—38 |
| 4 | 蝦夷闔境輿地全図 | 嘉永7年版 | | (金) | 地—古—26 |
| 5 | 〃 | 〃 | | | 地—古—27 |
| 6 | 改正蝦夷全図 | 嘉永7年 | 版元名あり | | 地—古—30 |
| 7 | 蝦夷地全図 | 喜多野省吾 | 嘉永7年 | (金) | 地—古—29 |
| 8 | 蝦夷松前一円図 | 安政6年 | 文亀堂版 | | 地—古—35 |
| 9 | 東西蝦夷山川地理取調図(28枚) | 松浦武四郎 | 安政6年 | 291.038MA | |
| 10 | 官板実測日本地図：蝦夷諸島 | (初版) | 表紙茶・絹張 | | 地—古—40 |
| 11 | 〃 | 〃 | (再版)表紙緑・布張 | (金) | 地—108 |
| 12 | 〃 | ：北蝦夷 | (再版)表紙緑・布張 | (金) | 地—109 |
| 13 | 〃 | 〃 | (三版)表紙紺・布張 消印あり | | 旧分類473-5 |

刊行北海道全図

- | | | | | | | |
|----|-------------|------------|-----------|---------|-----|-------|
| 1 | 北海道国郡全図(初版) | 松浦武四郎 | 開拓使 | 明治2年 | (金) | 地—1イ |
| 2 | 〃 | (再版) | 表紙欠 | | | 地—1ロ |
| 3 | 〃 | (再版) | 表紙欠 | | | 地—1 |
| 4 | 北海道国郡略図 | 松浦武四郎 | 明治2年 | 袋付き | | 地—3 |
| 5 | 千島一覽 | 松浦武四郎 | 明治3年 | | | 地—2 |
| 6 | 射号日本訳図：北海道 | | 明治6年 | | | 地—5 |
| 7 | 北海道琉球諸島訳図 | | 明治9年 | | | 地—6 |
| 8 | 大日本分国北海道全図 | 田最上藤五 | 明治12年 | | | 地—7 |
| 9 | 北海道沿海図 | 吉田 晋 | 明治16年 | | | 地—8 |
| 10 | 改正北海道全図 | 内務省地理局 | 明治20年 | | | 地—9 |
| 11 | 〃 | 〃 | | | (金) | 地—9ロ |
| 12 | 新撰北海道輿地全図 | 大須賀龍譚 | 明治21年 | | | 地—10 |
| 13 | 改正北海道明細全図 | | 明治22年 | | | 地—11 |
| 14 | 北海道図 | 北海道庁 | 明治23年 | | | 地—86 |
| 15 | 北海道之図 | 阪部勘吉 | 明治23年頃 | 屯田兵村配置図 | | 地—87 |
| 16 | 北海道全図 | 金沢良太 | 明治24年 | | | 地—13 |
| 17 | 新撰北海道全図 | 田中太吉 | 明治25年 | | | 地—14 |
| 18 | 北海道里程図 | 建部英一 | 明治27年 | | | 地—15 |
| 19 | 北海道地形図 | 北海道庁 | 明治29年(初版) | | | 地—16 |
| 20 | 〃 | 〃 | 明治34年(三版) | 袋付き | | 地—133 |
| 21 | 北海道全図 | 中野四郎 | 明治30年 | | | 地—17 |
| 22 | 〃 | 中野四郎図 | | | | 地—82 |
| 23 | 北海道庁管内全図 | 清水常四郎・中村芳松 | 明治30年 | | | 地—19 |

24	北海道全図	鈴木茂行	明治32年(再版)	地—20
25	北海道全図	小樽新聞社	明治37年 袋付き	地—21
26	実用北海道新地図	嵯峨野彦太郎	明治39年	地—23
27	北海道道勢要覧図	小池・野原	明治39年	地—24
28	海陸里程新案北海道全図	嵯峨野彦太郎	明治41年	地—25
29	北海道拓殖一覽		明治41年頃	地—144
30	〃			地—145
31	北海道全図	北海道庁土木部	明治43年	地—72
32	最近実測北海道及樺太図	阿部芳治	明治45年	地—26

刊行樺太図

1	薩哈噠嶋漁場聯絡図	高木文次郎	明治37年	H664. 1-Ta
2	樺太島漁場実測図	北海道水産新報社	明治37年	H664. 1-Ho
3	樺太嶋全図	大野万歳館	明治38年	地—910-6
4	樺太及勘察加全図	時事新報社	明治38年(再版)	地—910-43
5	第壹樺太移住手引草		明治39年6月	H334. 591-Ka
6	樺太案内 渡航移住手引草		明治41年9月	〃

刊行地域図

1	北海道石狩州札幌地形見取図		明治6年	地—561-28
2	札幌市街之図(2部)	松島東一郎	明治22年	地—561-34、93
3	札幌市街之図	橋本辰四郎	明治24年	地—561-35
4	札幌区実地明細絵図	川瀬善一	明治26年	地—561-90
5	札幌市街之図(2部)	自治堂	明治36年	地—561-36、37
6	札幌区全図		明治43年	地—561-70
7	北海道石狩図	開拓使	明治8年	地—500-2
8	石狩明細地図		明治39年	地—554-4
9	函館市街全図	開拓使	明治7年	地—860-25
10	函館市街全図	鹿野忠平	明治11年	地—860-22
11	新刻函館港全図	児玉永成	明治15年	地—860-21
12	函館港実測図		明治16年	地—860-53
13	函館実地明細絵図	川瀬善一	明治24年	地—860-20
14	〃	〃	明治37年	地—860-16
15	函館全区一覽新地図	函館商工事務所	明治42年	地—860-15
16	最新函館市街全図	近江堂	明治44年	地—860-14
17	小樽高島市街之図並概覽表(2部)	村尾元長	明治24年	地—722-16
18	北海道後志国小樽港湾図	渡辺覚平	明治24年	地—722-58
19	小樽区平面図		明治40年	地—722-33
20	最近実測小樽区地図	西沢	明治41年	地—722-15
21	小樽市街之図	丸藤	明治44年	地—722-32

2 2	室蘭港	明治41年		地—661—42
2 3	室蘭港明細図	明治42年		地—661—47
2 4	母恋明細図	明治42年		地—661—9
2 5	室蘭町案内図	明治44年		地—661—10
2 6	北海道岩内市街明細絵図	神谷久三郎	明治29年	地—717—1
2 7	岩内港明細地図	田尻與吉	明治35年	地—717—2
2 8	岩内港全図	明治38年		地—717—5
2 9	滝川市街地全図	伊藤秀三郎	明治45年	地—525—3
3 0	北海道石狩国上川郡明細図	上川図書館	明治33年	地—410—1
3 1	”	阿部家文書		H091—A—2355
3 2	天塩国上川郡名寄市街明細図	松田旭堂	明治40年	地—422—1
3 3	旭川市街全図	三沢書店	明治41年	地—421—10
3 4	北海道十勝国全図	鳥居欣四郎	明治34年(初版)	地—310—2
3 5	釧路市街明細図	五十幡熊五郎	明治39年 袋付き	地—260—15

—完—

北海道立図書館江別移転40周年記念講演会記録

「資料で語る北海道の歴史」

(北の資料 第120号 特別号)

発行日 平成20年3月30日
編集 北海道立図書館北方資料部
発行 北海道立図書館
〒069-0834 北海道江別市文京台東町4-1番地
電話 (011) 386-8521
FAX (011) 386-6906
<http://www.library.pref.hokkaido.jp/>
